平成24年度

自己点検・評価報告書

目 白 大 学

大 学 院

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	国際交流研究科

（１）特筆すべき事項
大学院手当の改訂を機に研究科委員会構成員全員で修士論文指導に当たる体制を整え実施することができた。これは、従来論文指導教員５名ですべての学生の論文指導を分担していた体制から、論文指導補助教員にも指導を分担するように枠組みを拡大したものである。

【教育】
上記の研究科委員会構成員全員で論文指導に当たる体制を学則の変更等により整えることができ、平成24年度から実施できた。これにより、教員１名当たりの担当学生数が適正となるとともに、専門性の多様化を図ることができた。

【社会貢献】
研究科としては特に行っていない。基礎となる学部学科である社会学部地域社会学科の実施している地域フォーラム等に協力している。

【組織マネジメント等】
東日本大震災の影響は薄れてきたが、相変わらず留学生の多い学生構成は変わっていない。

（２）今後の課題
昨年度の本欄で述べた課題の継続が多い。
① 極端に留学生の多い現状の是正。
② 基礎となる学部学科からの内部進学の奨励等。
③ 社会人学生確保のため出願資格要件の見直しを検討する。

【教育】
平成24年度から実施した新しい論文指導体制の運用を適正に実行するための方策が課題。

【学生指導】
留学生が多いためか、学生の動静把握が困難である点がここ数年の課題であり改善されていない。特に、大学全体の中で院生は孤立しているかに見える。学部の留学生会との関わりなど模索してみる必要があろう。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	国際交流専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①７月30日に開催された「修士論文の中間発表」は教員の有益なコメントやアドバイスがあり、その後の論文作成指導には有効であった。 ②平成24年度より、教員と学生双方のミスマッチを防止するため、１年次の秋学期ゼミ履修生の決定を春学期の指導教員の面接による希望表に基づいて行った。 ③前年度までと同様、留学生には日本に関する研究や日本と母国との比較研究をなるべく行うように勧めている。 ④修士論文の要旨について、大学の公式ホームページ上で公開・公表を行っている。 （２）今後の課題 ①修了生の学会や研究会での発表、紀要などへの投稿を奨励する。 特に優秀で当該分野で一般に活用に資すると思われる論文については出版を勧める。 ②学生の質（特に留学生の日本語能力と専門の基礎学力）が低下傾向にあることから、入試で可能な限り質の高い学生を確保したい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 前年度に引き続き、授業の欠席の多い学生のフォローアップを行った。 （２）今後の課題 就職活動の助言や就職後の学生のフォローアップ体制を作る。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ＪＩＣＡや自治体などとの連携により、国際交流に関するプログラムを推進するための、研究科としての姿勢を検討する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①７月に修士論文の中間発表、２月に修士論文の最終試験を実施した。 ②今年度も広報活動・学生募集強化のため（ｉ）オープンキャンパスでの進学相談や相談会を実施し、（ⅱ）大学・大学院ガイド（日経ＢＰ）に専攻主任の広報インタビューや研究科の紹介を掲載した。 （２）今後の課題 ①国際交流に相応しい多様な国からの留学生（現在、中国が大半）と実践型の特性を活かした社会人学生を確保する。 ②留学生と社会人を含めた日本人学生の学生数のバランスを考えて異文化交流を高める。 ③将来的には受験科目に英語を課し欧米の文献講読（原書講読）を科目に入れる。 ④外部講師を招き年１～２回、講演やセミナー（ワークショップ）を実施し国際交流に適した授業とする。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 修了生の就職先などについてフォローアップする。また、修了生との交流の輪を広げる仕組みを作る。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	心理学研究科

（１）特筆すべき事項

①本大学院全体で導入した長期履修制度の利用を前提とした学生が初めて修士課程に２名入学した（現代心理学専攻入学者は４年間履修希望、臨床心理学専攻入学者は３年間履修希望。ただし、現代心理学専攻の該当者１名は９月末で退学）。
②各専攻とも入学者数が定員割れとなった。現代心理学専攻は定員20名に対して入学者16名、臨床心理学専攻は定員30名に対して入学者27名、心理学専攻（博士後期課程）は定員３名に対して入学者２名となった。
③平成25年度入学に向けて実施した入試の志願者数が、修士課程の各専攻とも前年より減少した。現代心理学専攻は志願者18名（前年比３名減）、臨床心理学専攻は志願者107名（前年比52名減）であり、とりわけ臨床心理学専攻は前年度の約３分の２にまで激減した。なお、心理学専攻（博士後期課程）の志願者数は前年度と同数の３名であった。
④現代心理学専攻で修了延長となる学生が増加している。
⑤平成25年度実施に向けたカリキュラム改訂(それに伴う履修規程の改訂)と担当教員(非常勤を含む)の再検討を実施した。

（２）今後の課題

①研究科全体として受験者、入学者の増加に向けた対策を講じる必要性がある。
②教員の負担増への対策（各専攻の定員の適正化、留年学生への指導、修士論文及び実習指導のあり方等）を検討する。
③修了後の指導のあり方（卒後研修、臨床心理士試験合格率向上等）を検討する。
④現在、各専攻が個別に学生の研究倫理審査を行っているため、研究科として統一した研究倫理審査の体制作りが必要である。
⑤教員個人だけでない、研究科または専攻全体としての社会貢献のあり方について検討する。
⑥③の一方策として、修了生の卒後研修をフォローするために心理学研究科の修了生で臨床心理士の資格を持っているＯＧ・ＯＢの組織化をすることが必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	現代心理学専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①入学者数が定員を割ったこと（平成24年度は定員20名に対して入学者16名。23年度は23名入学）。 ②長期履修制度を利用する社会人が１名入学したこと。 ③２年間で修了できず修了時期を延長する学生が増加傾向にあること。平成24年度は５名が２年で修了できなかった。 （２）今後の課題 ①応募者、入学者の減少傾向の分析と対策の立案。 ②長期履修生への適切な指導方法の確立。
学生指導	（１）特筆すべき事項 経済的事情等、個人的事情から学問、研究に集中できない学生が増加傾向にある。結果的に修了延長となる学生の増加にもつながっている。 （２）今後の課題 上記（１）の学生を減少させるための対策の立案と実行。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①在学生の約３割が有職者であり、年齢や職種が多様な社会人学生を受け入れることで社会人の生涯学習機会を広く提供できている。 ②専攻としての社会貢献活動は行われておらず、専攻所属の各教員が個別に適宜社会貢献を考えている状態である。 （２）今後の課題 社会人学生の受入れ以外に専攻としての社会貢献が可能かどうかの検討。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 各教員が専攻内での役割を意識し、ほぼ自律的に機能していると考える。 （２）今後の課題 今のレベルが維持できるようにする。
その他	（１）特筆すべき事項 学部と研究科の双方の業務が重なり、教員の負担が増大している。 （２）今後の課題 ①専攻の定員（現行は入学定員20名）が適切かどうかの再検討も必要。 ②卒後教育、卒後研修のあり方の検討が必要。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	臨床心理学専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①元九州大学大学院教授・国際基督教大学教養学部客員教授の北山修氏による講演会の開催（9月18日13:30～15:30／7号館7300教室／演題「覆いをとること・つくること」） ②臨床心理士資格試験の合格率の低下（現役受験26名中10名が合格〔38.5%〕。全国平均合格率は59.1%。平成23年度は全国平均60.6%に対して本学は現役受験23名中15名が合格〔65.2%〕） （２）今後の課題 昨年を下回った臨床心理士試験の合格率のＶ字回復
学生指導	（１）特筆すべき事項 修士論文作成のための臨床心理学専攻研究倫理審査委員会の創設により、インテンシヴな研究指導が可能となった。 （２）今後の課題 大学院で初めて心理学を学ぶため心理学基礎力が不足している学生に対する修士論文指導のあり方の検討
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①「コラボさいたま2012」（11月）に「認知行動療法による禁煙・節酒プログラムの開発」（原田隆之准教授）を出展した。 ②法務省矯正局・各地医療機関等で「違法薬物依存症治療プログラム」開発を行った（原田隆之准教授）。 （２）今後の課題 心理カウンセリングセンターでのカウンセリング以外の、各教員の専門性を活かした社会貢献活動の推進
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 専攻の在籍学生数に応じた心理学研究科所属の教員の再配置
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①昼間の大学院希望者が増加する中で、臨床心理学専攻が昼夜開講制を継続することのメリット・デメリットの再検討 ②臨床心理士資格試験の不合格が２年以上のいわゆる多重浪人学生に対する大学院修了後の指導のあり方についての検討

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(博士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	心理学専攻

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項

①平成24年度の新入生は２名で、定員（３名）を１名下回った。
②平成24年９月修了生で博士（心理学）の学位取得者が１名あった。
③平成25年３月に修了して博士号を取得した者はいなかった。

（２）今後の課題

①３年間で学位を取得し、修了できるような指導のあり方をいっそう真剣に検討する必要がある。現状は、３年間の在籍だけでスムーズに博士号を取得できない者の方が多い。査読付きの学会誌に掲載される論文を作成することが困難な状況が平成23年度以前から続いている。
②修了生が心理学の専門家として就職することが困難であり、博士号取得後の就職支援体制を研究科として確立する必要がある。
③受験生の増加並びにレベルアップを図る必要がある。受験者の中でも博士課程に合格できる実力を持つ者は一部に限られるため、受験生を増やすことが在学生全体のレベルアップにも結び付くことになる。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート （学部長/研究科長記入）	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学研究科

（１）特筆すべき事項

経営学フォーラムの内容を一新して、全教員が個々の大学院生の論文指導に当たったため、論文の質が向上し、修士論文においては学会投稿レベルのものを書く学生が出てきた。こういう学生が出てくるためには研究環境を充実させなければならないが、現在、図書館では本研究科をサポートするための文献データベースをいくつか導入している。これを利用するためのガイダンス教育を紀伊國屋書店等と協力して実施した。

（２）今後の課題

①学生のレベルを上げるためには、［１］ゼミの充実、［２］研究環境の充実があるが、研究環境の充実の一つとして文献データベースの拡充がある。平成24年度においてはまだ、経営学全分野をカバーできるだけの文献データベースは導入されていない。可及的速やかに全分野をカバーするだけの文献データベースの導入が課題となる。

②経営学がカバーする分野は尨大なため、現教員だけではとうていカバーできない。教員の拡充が必要であるとともに、教員の研究能力の向上・専門分野のバランスのよい配置を大学院において考えることも重要な課題である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	経営学専攻（修士課程）

項目	自己評価
教育	（１）特筆すべき事項 ②経営学フォーラムの時間において、大学院における研究の手法について講義を実施して成果を得た。多くの教授が主体的にフォーラムに出席して指導を実施した。 （２）今後の課題 平成25年度においては、経営学の基礎学力が不足している留学生については、関連する経営学部の講義の履修を推奨することにより大学院レベルの専門的知識の充実を図ること。
学生指導	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 大学院生の個々の学力に応じた個別指導が一部不足していたことから、問題点を精査し、平成25年度から経営学部の若手教員を大学院修士課程において論文副査指導教員として指導に当たれるようにした。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 平成24年度は経営研究所などとの共催による公開講座は開催しなかった。 （２）今後の課題 平成25年度は経営学フォーラムにおいて、企業において活躍している実務家を招いて、公開講座を実施予定である。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①経営管理コースにおける教員一人当たりの指導学生数が一部の研究室に偏っていたため、学生の希望に基づいて適正な人数への改善を進めた。 ②研究科委員会の運営について透明性を確保することに努めた結果、研究科委員会を公正に運営することができ、教務事務について情報の共有を図ることが可能となり、学生指導が適切に行われるようになった。 （２）今後の課題 経営学研究科所属教員の一人当たりの指導学生数に制限を設け、若手の教員の教育的技量の向上を図ること。平成25年度は、定年退職した教員分の公募による補充が必要となる。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①修士課程の在学者のうち、中国人を中心とした留学生の比率が極めて高いことから、今後の対策として、大学院教育が充実していることを外部に発信して日本人の応募者を増やす必要があると考えている。具体的には、大学院フォーラムを利用して一流の経営者を招き、講演してもらっていることを、インターネットで発信する等の対策が考えられる。 ②研究科の問題点である経営管理分野の教員の公募により、欠員補充を行い、学生の研究活動が良質な環境によって行われるよう改善を図る。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(博士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	経営学専攻（博士後期課程）

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項

①経営学においては、事例研究など、企業の公表データに加えてインタビュー調査、アンケート調査を行って具体的な調査データを得ることが多い。これらのデータに対して多変量解析の種々な方法を当てはめて、モデルを構築し、新たな知見を得ることが多い。そのため、どうしても統計解析・データ解析の専門家が必要である。そこで、本学の張元宗教授がこの分野で専門家であることから、新たに博士課程指導教員として迎え、当該分野を拡充した。

②博士後期課程の授業科目を見直し、会計関連科目を整理し、指導の一貫性が明確になるようにした。

（２）今後の課題

①博士後期課程の充実を図るためには、ターゲットを明確化することが重要である。現時点で本研究科がとるべき方向を考えると、学生のターゲットは、企業でキャリアを積み、業績を上げ、定年を迎えた人である。これ等の人を博士課程に迎え、企業でなして来たことを学問として見つめなおしたときに、何をやったことになるのかを明確化し、それに対して学位を授与するということである。これならば、本学の地の利を活かせ、教員のマンパワーを十二分に発揮できるので、そのためのマーケティングをどう行うかが今後の課題である。

②本学博士後期課程をより一層魅力的なものとするためには、若手教員にできるだけ博士課程教育を分担してもらうことが重要であるが、そのために本研究科の研究環境を改善し、若手教員が研究に専念できる環境を整備することが喫緊の課題である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉研究科

（１）特筆すべき事項

＜生涯福祉研究科の周知を図る取り組み＞

①生涯福祉研究科主催の公開シンポジウムを初めて開催

大学院生の入学者を増やすことを目指すためには、生涯福祉研究科の周知が重要である。その一環として今年度から研究科主催の公開シンポジウムを研心館で開催した（3/2）。開催に当たって、臨時の予算編成をお願いし、法人の承認を得た。テーマを生涯福祉とつなげて、「発達障害のある人のライフステージをみすえた支援と課題」とし、人間福祉学科、子ども学科と共催、リハビリテーション学研究科と協賛した。また、新宿区、中野区、新宿区教育委員会、新宿区社会福祉協議会、中野区社会福祉協議会の後援を得て、地域とのつながりも大事にして実施した。シンポジストは就学移行支援、就労移行支援で活躍されている７名で、目白大学教員４名が司会などを担当した。参加者は100名を超え、約４時間のシンポジウムは成功裡に終了した。次年度からも継続して実施する予定である。

②学科および外部団体主催の講座への協賛

昨年度から外部団体の主催する研究会･シンポジウムが学内で開催される場合、生涯福祉研究科名を協賛や共催として明記するようにした。今年度は、初めて子ども学科主催の公開講座で協賛した。また、昨年度同様に５月の「学内ＮＰＯ法人障害者就業生活支援開発支援センターGreen Work21研修会」を協賛とした。さらに、次年度にリハビリテーション学研究科が主催する学会を共催することにした。

③オープンキャンパスと進学相談における相談者の増加

今年度のオープンキャンパスで大学院への相談や研究室における進学相談に７名の相談者があった。その結果、大学院の受験や研究生の受験者につながった。これはこれまでにない成果であり、次第に生涯福祉研究科が知られるようになってきたように思われる。

＜研究指導体制の強化＞

①デザイン発表会の設置

これまでの修論指導の反省から、今年度より修士２年の中間発表の日に修士１年に研究デザイン発表Ｉを設定して、研究のおおまかな構想を発表する機会を設定した。今年度では、修士１年４名と修士２年２名が発表し、修士論文作成につなげるように配慮した。なお、次年度の５月にデザイン発表Ⅱを予定している。

②中国からの留学生を初めて「育てて送り出す」

中国籍の院生は「早期教育に関する親の養育行動と幼児の発達 ―中日比較調査から―」の修士論文を作成し、研究科として初めての留学生を保育学修士として送り出すことができた。

③非常勤講師の資格審査

開設時からお願いしていた「児童福祉特論」の外部講師が平成24年度を最後に非常勤講師を辞退されたため、後任の教員について大学院資格審査会で認定を受けた。その他、退職教員１名については、大学院客員教授として承認を得て次年度も授業をお願いした。

＜入試方法の見直しと実情＞

平成23年度からＡＯ入試の導入、一般入の試験科目から英語を外すなど大幅に変更したが、今年度からは、ＡＯ入試、社会人入試の受験資格を明確にし、合わせて試験形式についても変更した。これにより、社会人の入学希望者に対して門戸を広げ、受験しやすい体制に整えた。また、社会人の入学希望者に対して社会人体験・現場実務の能力や研究計画の是非を厳正に判定するため、面接担当教員を増やして合否の判定を行った。その結果、前年度の６名に続き、今年度も５名が入学した。ＡＯ入試により現場で保育士として働いていた１名が入学した。また、前年度に初めて中国籍の院生が１名入学したが、今年度は３名が入学し、その内訳は中国籍２名と韓国籍１名であった。しかし、中国籍の１名は、秋学期から他大学へ進路変更したため、最終的には、大学院１年生は４名となった。外国籍の院生は一般入試で入学したが、なかには、語学力が不足している院生もおり、今後は学部の福祉や日本語教育の授業の履修などを義務づけ、修士論文の作成に支障がないように配慮する必要もある。

＜長期履修制度の設置と適用の開始＞

平成24年度から「長期履修制度」が導入され、社会人が入学して学びやすい環境が整えられた。初年度のため、手続きで混乱がみられたが、社会人である保育士１名がその適用を申請して入学が許可された。その後、手続きに関して整備がなされ、今後、大学院で学ぶ社会人の入学者増につながることが期待される。

＜多様な研究・調査の場の確保＞

生涯福祉研究科の元教授（平成23年度から非常勤講師）の主宰するNPO法人「障害者就業生活支援センター」（学内に本部設置）と、別の客員教授主宰のNPO法人「福祉フォーラム・ジャパン」（学内に支部設置）を設けている。このＮＰＯ活動へ大学院生も参加し学びを深めることができた。

＜実験実習費の見直し＞

次年度の予算編成において、ヒヤリング結果を反映する形で、実験実習費の「研修費」を削除して院生の負担の軽減を図る一方で、授業や授業の補充として外部講師を招く費用の項目を立てた。福祉関連の授業内容の充実に寄与できるように配慮した。

（２）今後の課題

＜応募者・入学者数の確保策＞

①留学生の増加と対応

昨年度に初めて外国籍の院生が入学したが、今年度は、さらに中国人の留学生３名が入学した。そのうち、１名は途中で転学をしたが、今年度は計３名が在籍したことになる。今後も中国からの留学生が増えることが予想され、入学者が増加することは歓迎すべきことである。これまでも留学生は、まじめに学業に取り組んでいるが、学習を深めて優れた修士論文を作成するためには、日本語の語学力を高め、専門分野の基礎的知識を増やすことが必要である。学部における日本語や福祉の科目を履修できるような柔軟な対応が必要になると考えられる。

②生涯福祉研究科の魅力を周知する活動

今年度当初より、研究科会議で入学者の確保に向けた課題と取り組みを話し合ってきた。そのなかで、生涯福祉研究科として初めて公開シンポジウムを開催して多くの参加者があった。また、関係学科の公開講座に協賛の形で周知を図ったり、人間福祉学科や子ども学科の実習先へチラシを例年以上に配布したりするなど研究科の周知に向けて努力した。

しかし、研究科会議で話題とした基幹科目への専任教員の配置、大学院入試形態の検討、大学院修士論文のあり方、時勢に即したカリキュラム構成、認定社会福祉士などは議論が深まっておらず、今後に積み残した課題である。特に、入試形態と修士論文を必須とするかなどは、大学院研究科としての価値や入学者の募集に係わる課題であり、他大学の情報収集もふまえて検討を深める必要がある。

③目白大生や卒業生への働きかけ

平成25年度入学生に子ども学科から１名受験して合格をしたが、内部から大学院に進学する学生が少ない。しかし、生涯福祉研究科の特徴として福祉現場で働く社会人のリカレントもあるため、今後、卒業生に対するリカレントとして働きながら大学院に進学することをアピールしていくことが重要になる。さまざまな機会を活用して大学院への進学を勧める必要がある。

＜教員人事＞

教員人事は、専任教員の全員が学部兼務（子ども学科及び人間福祉学科）であるため学部の人事が優先され、大学院の人事もそれに従わざるを得ない難しさがある。今後、基幹科目を非常勤講師に依存している状況を打破するため、学科に新たな教員の補充が予定されていないことから大学院専任の特任教員などの採用を求めることも必要であろう。また、一部の専任教員の定年を控え、カリキュラム構成と合わせてその対応を考えなければならない。

＜実践的研究の推進＞

生涯福祉研究科の特色である多様な研究・調査の場（NPO法人「障害者就業生活支援センター」やNPO法人「福祉フォーラム・ジャパン」）をさらに活用するとともに、院生が在職する施設と連携して実践的研究を推し進める必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①少人数制対話形式による授業形態 ②院生の選択による修士論文指導教員の決定と一対一のきめ細かい論文作成指導の徹底 ③修士論文審査時の主査と複数の副査による論文評価と教員のコメント用紙記入による院生へ詳細なフィードバック ④社会人の臨床経験の理論化の視点からの教育と社会人の再教育役割の提供 ⑤院生の臨床現場（障害者就労支援施設・母子生活支援施設・養護施設・発達障害児支援施設・重症心身障害者など）への参加による理論と臨床実践の促進による修士論文の深化 ⑥中国からの留学生１名が初めて修了 ⑦研究生に人間福祉学科･子ども学科の授業を聴講可能とした （２）今後の課題 ①論文作成のためのフィールドや調査対象者確保の困難さおよび倫理的配慮の問題 ②社会人が多く、院生に時間的余裕がないために、指導が十分できないことへの対応と具体的な論文執筆に関する指導の充実 ③留学生の日本語力の向上や社会福祉の知識獲得に向けた指導体制の確立
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①少人数であるので、一人一人の関心と興味に合わせた学習や指導が行き届くこと ②福祉現場で働きながらの学習や論文作成に当たる学生も多いので、現場体験を踏まえた指導と研究の方向性についての踏み込んだディスカッションが可能であること （２）今後の課題 ①福祉・保育現場への勧誘－実習・研究会・講演会・研修会への参加費の援助と勧誘 ②修了生を交えた定期的な交流の場の設定
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①公開シンポジウムの開催：新宿区と中野区の後援 ②目白大学内で、ＮＰＯ障害者就業生活支援センターの運営 ③大学内で、ＮＰＯ障害者就労支援チャレンジショップの運営と障害者による販売実習の支援 ④大学内に、ＮＰＯ福祉フォーラム・ジャパン（医療・保健・福祉分野での交流・研究・事業開発など）の支部設置 （２）今後の課題 ①大学内設置の障害者就労支援チャレンジショップへの学生・院生の補充と教育による支援活動の継続 ②ＮＰＯ福祉フォーラム・ジャパンを設置し、デンマーク・ネストベスト市との交流事業（現地での介護実習）などに院生参加を勧誘
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①月１回の専攻科会議の開催による教員間の共通認識と役割分担（教務・入試・評価・倫理委員会）の徹底 ②入試方法の変更（ＡＯと社会人入試の出願資格を変更し、福祉や保育領域における社会人経験者の出願促進を図った） ③業務分担の徹底（オープンキャンパス・進学相談会・メール等による個別相談の充実） ④中間発表・デザイン発表（構想発表）を実施し、修論作成指導の徹底 ⑤修士論文公開発表会（年２回）の実施と院生との修了記念会の実施 （２）今後の課題 院生に関する会計事務に関する担当者の確保
その他	（１）特筆すべき事項 ①院生確保のため子ども学科の保育・教育実習あいさつまわりの際、大学院パンフレットの配付および子ども学科公開講座の案内書送付の際に大学院のパンフレットを同封することとした ②子ども学科で年２回開催している公開講座を、平成24年度より大学院を協賛とした （２）今後の課題 ①他大学の大学院の入試形態や資格取得などに関する情報を収集し、院生募集などに活かすこと ②社会人・学部生への情報拡大方法の検討と定員割れを解消して院生数を増加させること ③基幹科目を担当する非常勤講師の後任を学外に求めざるを得ない状況に対応すること

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	言語文化研究科

（１）特筆すべき事項

①論文指導体制の強化：「修士論文指導演習３・４」を設置し２年次院生の単位取得を可能にすることで、論文指導体制を強化した。

②修士論文中間発表会の開催：修士論文提出該当年次の全学生に各研究テーマに関する研究発表を合同公開で行わせ、言語文化研究の全体的な見地の共有を図るとともに、論文指導の厳格化を図った。

③留学生が多いことから、各指導教員は、論文執筆など研究学習面での指導助言に加え、生活面、経済面での面談を実施するなど個別のケアを行った。

④公開授業・研究会の開催：公開授業、公開シンポジウム、公開研究会を開催し、研究活動の活発化に貢献した。

⑤教員の拡充：a. 研究論文指導演習担当者１名交替
（日本語教育分野・前任者退職（金沢朱美教授）につき新任者着任（池田広子准教授））
b. 研究論文指導演習担当者１名増員（日本文化分野）（岩下均教授）

（２）今後の課題

①継続的な問題として２専攻において定員未充足の状況にある（英語・英語教育専攻、中国・韓国言語文化専攻）。定員を充足する１専攻（日本語・日本語教育専攻）においても入学生の過半数が留学生（９割は中国人留学生）である。以上が多くの問題の原因となっている。問題解決のためさまざまな努力を重ねてきているが、次年度においても継続して実施する（カリキュラムの見直し、論文指導体制の改善、留学生ケア、公開授業・公開シンポジウム等の実施、広報活動の積極化など）とともに、さらなる改善が求められる。

②教育研究組織としての拡充、より魅力ある大学院への改善、志願者の増加を目的とし、博士課程の設置を検討する。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	英語・英語教育専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①修士論文最終試験では、プレゼンテーションの練習を徹底し、説得力のある発表を行うことができるように導いた。 ②６月の外国語教育研究会では、修了生が修士論文の書き方、完成へ至るプロセスにおける苦労話や工夫などを発表した。修士２年生を方法論や理論面、および精神面から支えることができた。 ③10月の公開シンポジウムを英米語学科と共催で実施した。ライティングに関し、理論面の講演に続いて実践例３例が発表された。参加者から活発な質疑がなされ、院生に良い刺激を与える討論となった。 （２）今後の課題 ①入学試験では英語の学力試験を課していないため、学生間には基礎の英語力において学力差がある。授業では英語のディスカッションや質疑応答の時間をバランスよくとり、論文作成能力だけでなく、学生の高度の英語力の向上を効率的に養成できる授業計画が必要である。 ②学生の授業評価を詳細に検討し、さらに魅力的な授業となるように、改善策を考案したい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 日本人学生が半数前後を占めることが多い専攻だが、留学生への配慮も必要である。特に経済的な問題を抱えている学生には、研究論指導演習１および２の指導教員が中心となり、面談時間を増やすなど、学生の心身の面での助言を行った。 （２）今後の課題 ①留学生の中には、高度の英語力はあるものの、授業時の日本語での応答やカリキュラムの解釈の場面での日本語使用において、勘違いや誤解がみられた。また、ワープロ印字などコンピュータ操作が不得手で、執筆が進まなかった学生もいた。英語力の向上だけでなく、日本語口頭発表時の指導などを通して高度の日本語能力の養成を図るとともに、ＩＣＴ能力の育成を図る必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 公開授業や公開シンポジウム・研究会を開催し、大学院生だけでなく、学部学生や、地域で英語に関心のある人々が専門知識を広げることや討論の機会を得ることにつながった。 （２）今後の課題 より魅力的なテーマを選択し、地域の人々が参加できる公開シンポジウムを企画する必要がある。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 入学定員の充足ができていないため、改善が必要である。特に英語学関係の志願者がきわめて少ない。 （２）今後の課題 入学定員の充足に向け、専攻の構成員全員が協力して活動を行う必要がある。高度の英語学力と、研究意欲を有した学生の獲得を目指し、入試広報活動を検討する余地がある。
その他	（１）特筆すべき事項 公開授業や、公開シンポジウムおよび外国語教育研究会を開催し、研究活動の活発化に貢献した。 ①第４回外国語教育研究会（6/23）参加者38名 発表「韓国語基礎教育の指導と教育効果-目白大学の韓国語学科1年次の教育事例」金河守（目白大） 講演「コミュニケーション方略（CS）を使用した会話の協働構築」藤尾美佐（東洋大） 修了生シンポジウム：「私はどのように修士論文に取り組んだか」 ②公開シンポジウム「日本の英語教育を発信する 第５弾」（10/27）参加者37名 講演「英語作文と国語作文のコラボレーション ―Universal rhetoricという考え方―」大井恭子（千葉大） a.「英語学習のモチベーション向上に向けた取り組み：ライティングの視点から３つの事例紹介」前田ひとみ（目白大） b."The Process Writing Method" William Biolsi(目白大) c.「Contextを生かすライティング学習」眞田亮子(目白大) ③公開授業『早期英語教育とマザーグース』鷲津名都江（目白大）「英語のリズムはスキップのリズム」（11/16）参加者:５名 （２）今後の課題 大学院生だけでなく、学部学生や、中学・高等学校の現職の教員が興味を持つ研究企画を打ち出し、研究を活発化する必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	日本語・日本語教育専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①修士論文指導担当者が１名増員され、日本文化・文化比較分野での一層充実した指導が可能になった。中国人留学生２名が指導を受けている。 ②日本語教育分野での教員交替があったが、ゼミ学生の引き継ぎはほぼ問題なく行われた。学生は１年次設定の研究テーマを変更せずに、修士論文執筆を進めることができた。 （２）今後の課題 ①入学試験に小論文が導入されて以来、学生の「書く力」は、若干、担保されるようになっている。しかし、中国人留学生が大半であり、一部の日本人学生も含めて「修士レベルの日本語力」には遠く及ばない例が多い。「論文を書く能力」を確保させることを考えなければならない。 ②「学校教育と対話」「非日本語母語話者と小学校教育」「国際理解教育」などのテーマにつき、入学希望者があり、また指導担当者がいるため学生を受け入れているが、これに関する講義科目が設定されず、いきおい、個人指導に頼ることになっている。仮に「教育学研究科」が新設されればそこでの教育が適切と思われるが、当面、この分野での授業科目設定が必要ではないか。
学生指導	（１）特筆すべき事項 過去、少数ながらほぼ毎年休・退学者を出してきたが、平成24年度は１名も欠けることがなかった。学生の質が、総体的に一定水準に達した結果と思われる。ただし、平成24年度修了予定者14名のうち２名が留年となった。 （２）今後の課題 上記（１）と一部矛盾するが、アルバイトが主流の留学生もおり、論文指導には、教員の想定外の努力が必要であった。また、アルバイト職場で学んでいる「生きた日本語」が、必ずしも「日本語・日本語教育」にふさわしいタイプのものではないこともある。経済面と勉学姿勢の兼ね合いの指導が難しいところである。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 例年１～２名の日本人学生は社会人で勉学意欲も強く、教室のリーダーとなっており、今年度も同様であった。ほとんどが職業を継続し両立を図っているが、一部の休職者も修了後は現場復帰を果たしており、社会人のスキルアップの場として存在意義を示している。オープンキャンパスや入試相談会でも、来場者にこの点を強調している。 （２）今後の課題 ①現時点まで、専攻として独自の社会的発信はできていない。今後は、たとえば日本語・日本語教育学科、日本語別科などと協力し、外部と繋がる学会を開催することも必要であろう。 ②修了生を、国内外の高等教育機関の専任教員として就職させたいが、平成24年度は不可能であった。ただし、修了後、ある期間を経過しての就職は過去にもあるので、求人情報に敏感であるべく努めたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①研究論文指導演習担当者１名交替（日本語教育分野・前任者退職につき、新任者着任） ②研究論文指導演習担当者１名増員（日本文化分野） （２）今後の課題 本専攻の専任教員７名のうち、他学部や他学科所属、あるいは日本語別科を兼務する者が５名である。日程・時程の調整が、ときに困難である。解決法を考えたい。
その他	（１）特筆すべき事項 ①日本語・日本語教育学科主体の海外での日本語教育インターンシップに本専攻から１名が応募し、派遣された。平成25年度にはその実践が評価され、中国の大学での採用に繋がった。この制度は、派遣資格者が「日本語母語話者」に限定されるため、該当者は現状では少ないが、有効活用されて良い。 ②平成23年度から引き続き、中国同済大学からの留学生を秋学期から１年間、受け入れている。学力・人物ともに優秀であって、他の学生への良い刺激となっている。希望者があれば、継続的に受け入れたい。 （２）今後の課題 ①本専攻においては、留学生のみの授業はレベルが保ちにくい。日本人入学者の確保に努めたい。 ②日本語・日本語教育学科との連携を密にしたい。現状では、大学院修士論文中間発表会と最終試験を、学科のＦＤとし、大学院担当ではない教員の出席を勧めるのみであるが、機能しているとは言いがたい。 ③上記「教育」の（２）今後の課題と重複するが、日本語・日本語教育学科学生で国語科教員志望者も多い。この学生の「受け皿」を本学内に設置することは不可能であろうか、各方面でお考えいただきたい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	中国･韓国言語文化専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①論文指導演習の強化：研究科長の発案に基づき、論文題目届、論文題目変更届の徹底を考慮し、「修士論文指導演習」を強化し、同科目３・４を設置して２年次院生が修士論文指導演習を２年次にも単位取得できるようにした。 ②「臨地学習」の充実：中国分野韓国分野ともに、教員が院生を学習に関係する現地に引率して学習を深めた。学生は「臨地研究」を実施している。 ③特別講師による授業の多角化：中国分野韓国分野ともに、授業等に学会・研究分野の研究者、著名人を招いて学習を深めた。韓国分野ではアカデミー賞にノミネートされた梁英姫監督の特別講演を実施、その場面が収録されＷＯＷＷＯＷで放映された。中国分野・韓国分野ともに、協定校からの来訪があり、授業への参加、学内外の案内などで、院生はこれを補助した。 ④教材開発の活発化：中国分野、韓国分野ともに各教員が教材研究を継続している。 ⑤学内外において中国・韓国に関連する研究会・シンポジウムを実施した。 （２）今後の課題 ①年度にあわせた教育内容を工夫しながら、現地教育・校外教育のさらなる充実を図る。 ②特別講師の人選、講義の時期などを、可能な範囲で計画的に進める。来訪者の接遇に関して院生の関わりを考慮する。 ③教材を出版物として世に出し活用することを推進する。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①論文主査と論文主指導教員の役割の明確化：修士論文指導教員の指導によって研究を進めてきた院生の修士論文査読は、査読教員が別に行い、具体的に明確化された。 ②修士論文中間発表会、修士論文発表会の各専攻合同公開実施：広い見地からの言語文化研究の進展、院生の論文指導の厳格化を図った。 ③各種学会活動と院生の論文指導との連携を深めた。院生は修士論文の内容を学会発表、研究会発表した。 ④学生指導の観点から、学部学生と大学院生との活動の連携を図った。 （２）今後の課題 ①院生の交流、院生の興味関心を考慮した、きめ細かな論文指導体制をいっそう進展させる。修士論文発表会の現状は、空間としては同一会場を用いながら、時間としては各専攻が分散化して参加している。発表会における指導助言、討議時間を考慮する。各種学会活動と院生論文指導との連携を深める。 ②日本における中国語教育、日本における韓国語教育という観点から、学部学生、大学院生、社会人とのさらなる連携を図る。 ③「韓国語教育資格」を院生が取得する要件の周知を図りたい。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①学会・研究会の主催：中国語学・韓国語学に関する各種の研究会や学会を主導し、研究会や公開シンポジウムに参加して、日本社会における中国語・韓国語教育の向上に貢献した。 ②大学院に多くの社会人学生を受け入れて、大学と社会とをつなぐ一定の役割を果たしている。 ③中国情勢・韓国情勢の緊迫化により、各種マスコミからの教員への取材依頼があり、これに応じている。 ④韓国文化院などから韓国語スピーチコンテスト審査員派遣の依頼があり、協力している。 （２）今後の課題 ①中国語学・韓国語学に関する各種授業観察会・研究会・学会を本学を会場として開催し、日本社会における当該語学教育の向上を図るとともに、各種社会団体の道理ある依頼には応じて、地域社会との交流を図る。 ②学部と連携して教職教育、資格教育の充実を図る。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①各種行事・業務にあわせて研究科委員会、専攻主任会議が持たれ、効率よく大学院の構成員間の連携、情報交換がなされた。 ②大学院教育の質の確保に特に留意し、中国分野・韓国分野の節度ある連携が図られている。 ③学科会議と大学院の分野会議とが重なり合って、学部と大学院の連携が自然と図られている。中国関連分野では学部会議と中国関連分野の連携が取られている。韓国関連分野では毎週水曜日昼、学科会議が行われ、それと同時に大学院の連携が取られている。 （２）今後の課題 ①業務の多様化によって会議開催が難しく、持ち回り形式の会議が増えたことから、専攻として齟齬無き意思疎通を図る。 ②日本における中国語教育、日本における韓国語教育という観点から、学部学生、大学院生、社会人との連携を強化するためにも、また受験生の確保のためにも博士課程の設置が望まれる。 ③シンポジウムや公開授業の参加者を増やし、研究の質を高めるとともに専攻の内容や特質を内外に周知する。
その他	（１）特筆すべき事項 ①言語文化研究科では、３専攻ある各専攻主任が入試広報委員を兼任することで各専攻の広報の充実を図っている。 ②すべてのオープンキャンパス、すべての相談会に参加し、受験志望者の確保を企図した。 ③留学生別科に対する大学院進学説明会は実施できなかった。 ④専攻の定員確保ができなかった。 （２）今後の課題 ①受験者数を伸ばし、定員を確保する努力を継続する。 ②錯綜する業務の効率化を図る。 ③研究時間を確保し、研究の深化を図る。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学研究科

平成24年度より大学院の長期履修制度（３～４年）が制度化され、看護学研究科に４名の院生の入学を許可した。

（１）特筆すべき事項

【教育】

①平成26年度入学者から上級実践コースを廃止することとし、それに伴う教科目の廃止、科目統合の決定をした。
②長期履修制度のスタートに伴い、３年間の指導計画の検討を行った。
③研究倫理審査のスケジュールについて検討し、平成25年度からの教育計画を見直した。
④教育課程は計画通り実行され履修状況も良好である。

【入学選抜と学生指導】

①一般・社会人を対象に実施し、４期生13名の学生を迎え入れた。内訳は、医療施設の看護管理者、看護教員といった職域は変わらないが、広報の成果として保育所看護師が入学した。年齢的には中堅・管理クラスの学生を多く受け入れている。また応募者は、修了生、在学生の推薦、紹介及びホームページ閲覧をきっかけにしているケースが増えている。
②入学時より論文指導教員と他教員によるチームティーチングにより、計画的な論文指導が行われている。平成24年度は１名を除いて13名が学位を取得した。

【社会貢献】

大学院と国立病院機構埼玉病院の共同研究３年目として、和光朝霞地区住民、がん患者・家族を対象にヘルスプロモーションプログラム（太極拳）を開催した。

【組織マネジメント】

専攻主任を置いた。教員組織の充実を図るため研究指導教員１名、教科目担当１名を任用した。

（２）今後の課題

①長期履修コースの教育計画 特別研究の指導強化（スケジュール見直し）
②社会人学生に対応したフレキシブルな授業時間
③学部卒業生への広報活動や受験応募者を対象とした公開授業
④修了生からの博士課程開設の要望にどう応えていくか将来展望が必要
⑤平成25年度重点課題として、専攻分野の特徴を出すためのカリキュラム検討。特に、看護の大学教育に携わる人材育成は看護系大学院の喫緊の課題である。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①２年次生13名が修士論文および最終試験に合格した。 ②カリキュラム検討委員会を設け、次の２点のカリキュラム改訂を行った。 １）平成26年度入学者より上級実践コースを廃止することとし、それに伴う教科目の廃止を決定した。 ２）コースワークとしての教科目の見直し統合を行った。 ③平成23年度より検討していた長期履修制度を開始し、３年間の長期履修生の指導計画の検討を行った。 （２）今後の課題 ①長期履修コースの特別研究における教育計画の検討 ②特別研究の指導強化におけるスケジュールの見直し ③社会人学生に対応したフレキシブルな授業時間 ④専攻分野の特徴を出すためのカリキュラム検討
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①修了生が関連学会で研究成果の発表を行った。 ②年度末に学生間での懇談会を開催し、仕事と学業のバランス維持のための情報交換および意見交換を行った。 （２）今後の課題 修了生の学会誌投稿への指導強化
社会貢献	（１）特筆すべき事項 地域保健医療計画研究を通じて、がん予防に関するヘルスプロモーションプログラムを実施した。あわせて研究成果および講演会を実施し、療養者の参加も多数あり好評であった。 （２）今後の課題 学部卒業生や病院看護職を対象とした大学院授業公開の実施。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①平成26年度大学院入学募集に向けての広報内容を検討した。 ②学生募集のため、１月～２月に随時相談日を設けて教員が対応した。 ③指導教員と学生数のバランスを考慮し、募集活動と教員数の検討を行った。 ④図書室の増冊に努めた。 （２）今後の課題 図書室のさらなる増冊に努める。
その他	（１）特筆すべき事項 ①学生確保のために昨年と同様、リーフレットを作成し関連学会で配布した。 ②コミュニティ看護学分野は、新しい学問領域なので、開学時より応募者の開拓に力を入れてきた。本年度より応募者が増えてきている。 ③校舎内のＷｉＦｉ環境の設定により、院生のパソコン環境が向上した。 （２）今後の課題 学部卒業生への募集活動の実施方法の検討。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート （学部長/研究科長記入）	組 織 名 称 （評価単位名称）	リハビリテーション学研究科

（１）特筆すべき事項

○本研究科開設１年目であること、夜間授業のため教員の岩槻地区からの移動があることから、授業の円滑な実施、１年次からの特別研究指導体制の整備、学生との連絡体制の整備など、基本的な教育環境を整えることに多くの労力を割いた。

○第１期入学者は全員有職者である10名で、15名の定員を満たすことはできなかったが、現職業務と学業の両立という厳しい学習環境のなかで入学者は確固とした目的をもって真摯に学修に臨んでおり、担当教員の励みにもなっている。

○修士論文作成指導の特別研究は２年次配当科目であるが、研究テーマをほぼ決めて入学する学生が殆どであるため、１年次に指導教員を決定し指導を開始した。特に人を対象とする研究が多いところから、研究倫理審査に関わる指導を早めに実施した。

○リハビリテーション領域では、制度面、研究面、臨床面それぞれに発展的変化が大きいことから、必修科目において学外講師を招聘して講義内容の充実に努めた。（リハビリテーション包括的支援論特論、リハビリテーション医療管理特論）

○秋学期に本学科教育の一環として、内外の講師による第１回リハビリテーション学研究科フォーラム2012「高齢化社会へのリハビリテーション学の貢献」を研心館にて開催した。

○生涯福祉研究科授業科目より３科目を本専攻の選択科目に設定したが、受講学生も多く、一方、生涯福祉研究科から本研究科科目への受講者もあり、良い連携関係が形成できた。

○組織マネジメントの面では、教員間の連携を図り研究科運営に共通理解を得るため、全専任教員による研究科委員会を月１回定例化して実施している。また論文審査委員会、研究倫理審査委員会を設置して論文審査体制を整備すると共に、構成３分野委員に研究科長、専攻主任を加えた教務委員会、入試広報委員会を毎月１回程度開催してカリキュラムの円滑な実施、入試広報業務の分担を図っている。

（２）今後の課題

○学部と大学院が別キャンパスにあることによる教員の負担については、時間割の調整や学部での業務との調整を図り一定の改善ができたが、なお一層の工夫が必要である。

○定員15名に対して、平成24年度は10名、平成25年度は7名と定員確保が困難な状態が続いている。また作業療法リハビリテーション分野専攻者が多く、理学療法リハビリテーション分野専攻者が特に少ない現状である。この事態の打開のため、さまざまな機会を捉えた広報活動、頻回の入学相談会の実施など、研究科を挙げて取り組む必要がある。ただし２期生の半数以上が一定の臨床経験を経て進学してきた本学卒業者であり、本研究科が保健医療学部卒業者のキャリアアップのための機能を果たし始めていると評価でき、この方向での入学者確保にも力を入れていきたい。

○在学者から博士課程の開設を望む声が多い。リハビリテーション領域３分野を持つ博士課程は全国的にも極めて少なく、将来的な需要は見込まれる。看護学研究科との連携も視野に入れて、医療系分野の博士課程開設への検討が必要である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	リハビリテーション学専攻

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①大学院教育が実施される新宿キャンパスと教員が勤務する岩槻キャンパスが離れているため、２コマ続けての講義・演習を隔週で実施するなどの工夫を行った. ②入学者10名は全員有職者であり臨床の場で活躍中であるため、質の高い授業展開ができ、教員も刺激を受けることができた。 （２）今後の課題 ①講義・演習の授業を隔週で２コマ続きで行う方法は，教員が定常的にいる岩槻キャンパスと講義が実施される新宿キャンパスという現状を考慮すると、最善ではないものの、次善の方法であると思われるので、今後とも続けていきたい。 ②完成学年である平成25年度は、初めての修士論文作成を経て第１回修了生を無事に送り出すように専攻として努めたい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①特別研究は２年次配当科目であるが、１年次に指導教員を決定し修士論文作成の指導を開始した。研究倫理に関わる指導も早めに実施し、研究倫理審査会に提出させた。 ②全員有職者であるため、長期履修制度の利用を申し出た学生が多かった（５名）が、結果的に３名が短縮願いを出して、２年間で修了を目指す学生が大半となった。 （２）今後の課題 完成年次を迎え、１・２年生それぞれの修学が円滑に進むよう学生の指導を心がけていきたい。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 教育の一環として計画した第１回リハビリテーション学研究科フォーラム2012「高齢化社会へのリハビリテーション学の貢献」を一般にも公開し、健常高齢者に対する障害予防・健康増進を目的にした講演を２演題行った。 （２）今後の課題 今後もリハビリテーション学研究科フォーラムを開催して教育面での充実を図るとともに、広く公開することで社会貢献の役割も果たしたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①毎月、大学院教務委員会を開き、また必要な時期には入試・広報委員会と合同で開催した（岩槻キャンパス）。 ②リハビリテーション学研究科委員会を毎月，定例的に開催した（岩槻キャンパス）。 (2) 今後の課題 ①毎月、大学院教務委員会を、また必要に応じ入試広報委員会を開催する。 ②毎月、リハビリテーション学研究科委員会を開催する。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 完成年度を迎えた現在、学生の要望としても後期課程（博士課程）開設への希望が強い。検討を開始することが必要と考える。

学 部 ・ 学 科

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	人間学部

（１）特筆すべき事項

＜平成24年度の各学科の教育活動の総括＞
１　研究面
①前年度までと同様、各学科により研究の特徴が見られる。学会論文寄稿、研究論文・海外発表などに積極的に取り組む学科（心理カウンセリング）と、教育現場の実践を探求する研究に力点を置く学科（人間福祉・児童教育・子ども）とに大別できる。
②科学研究費や特別研究費への応募への取り組みについては、各学科とも応募数の増加がみられた。
③各学科に共通する傾向として、地域や多様な教育施設との共同研究や実践研究に取り組んでいた点が挙げられる。
２　教育面
①学生の学習意欲の喚起、授業規律の確立など、授業改善に関わる取り組みは各学科共通して取り組んできた。
②行事を指導の柱とする学科、教育現場への参加の重視、地域連携・ボランティアの奨励などは特色ある教育活動が展開されてきた。
③各学科とも、学級担任の業務の確認、ゼミ指導など、きめ細かな学生指導に取り組む姿勢が見られた。
３　今後の課題
①学科間の連絡・調整・情報の交換、学内各組織と学科の活動との連携をさらに進める。
②人間福祉学科では国家試験対策を重視し、合格率を高める。子ども学科、児童教育学科では教員採用試験の合格率を高める。
③キャリア教育の充実、採用試験対策を強化する。
上記の課題を達成するため、各学科のカリキュラムの見直し、達成目標の明確化、連絡調整機会の設置などが課題とされている。教務担当者による学部共通科目の見直し・検討、学科長会議の開催は、上記課題への具体的な活動であった。

（２）今後の課題

①人間学部各学科の連携
本学部の４学科は互いに深い関係にあり、学生には他学科の授業にも参加する機会を与え、広い視野から、人間の健全な成長に関わる専門家としての確かな力量を高めさせていくことを目指す。
このための具体策として、以下の５点が挙げられる。
１）学部共通科目の見直し、設置する科目・科目数の各学科の教務委員等による検討の具体的推進。
２）地域の教育委員会との連携を促進する。心理カウンセリング学科は新宿区教育委員会と児童教育学科は中野区教育委員会と連携した活動を展開している。また人間福祉学科、子ども学科はさまざまな地域、教育施設と協働している。これらを関連させ、人間学部として、地域教育への貢献、多様な教育資源の活用による本学教育の有効な促進を図る。
３）多様な教育資産の開発・活用も学部共同で進める。
４）学科連携のための話し合いの場の設定を進める。平成22年度の学科の特筆事項にも記されていたごとく、心理カウンセリング学科と人間福祉学科の相互補助による活動、子ども学科と児童教育学科の芸術関連科目の相互担当など、すでに学科間の協力による実践が散見できる。こうした連携の具体的促進を図る論議の機会を設置したい。
５）本学人間学部に共通した、学習方法の改革に取り組んでいく。

②教育課程の内外における社会的・職業的自立の重視
大学教育の新たな方向として、課外のさまざまな指導を通じた有機的な関連が示されている、この背景には、学びから就業への円滑な移行ができていない現状の改善が大学教育の緊要の課題となっていることがある。
「課外のさまざまな指導を通じた有機的な関連」の具体的意義を考察するに、知識基盤社会から要請されている、持続可能な発展のための教育の推進会議方針に示されたように「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」を育成するために、大学教育のあり方を改善する必要を示唆していると受け止めることができる。さらに、多文化共生社会への対応について重視していくこともここに含まれると考えることができる。
それは、大学内部における教育活動全体および授業の改善を図ること、それに加えて大学を中心としつつ多様な教育資源の活用、さまざまな教育機関や地域とのネットワークの構築の必要に収斂できると考える。現場性と身体性を重視する人間学部の特質からも、これらを次年度も鋭意具体化し実践していく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	心理カウンセリング学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 予定通り、外部講師による学科講演会を2回実施した。 ①7月「幅広く活躍する目白の臨床心理士」(伊藤朋子講師・目白大学卒業生) ②1月「大震災被災者の心理的ケアについて」(鳥井望講師・東京都医学総合研究所副所長) （2）今後の課題 ①平成25年度も在学生対象の学科講演会を2回開催する。 ②平成25年度は外部実習授業（ピアサポート）の履修者が少なかったので、地域の小中学校への地域貢献は十分できなかった。 ③精神保健福祉士受験のためのコース履修者が少なく資格取得者も少なかったので、資格取得のための学生支援の充実を図る。
研究	（1）特筆すべき事項 論文等の発表が52件(国外２件)、および学会発表が40件(国外11件)と活発に行われた。 （2）今後の課題 論文発表をさらに増やすよう努める。 外部研究費はある程度獲得しているが，さらに補助金等を得て研究活動を活発に行う。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①就職率80%を目標としたが実績は76.4%であり、他学科（新宿キャンパスの四大全学科平均は87.9%）と比較しても低い値となった。 また、就職希望者そのものが少ない（卒業生144名に対して89名）とかなり少なかった。 ②4年で卒業できない過年度生数の目標を20名以下とした。前年度の実績は21名で今年度17名に減少し、目標は達成した。 （2）今後の課題 ①社会状況は厳しいが、今年度も就職率80%を目標とする。心理カウンセリング学科では就職希望そのものが少なく、就職率だけではなく実数が少ない点が問題となっている。キャリア委員とも今後の対応を検討する。 ②過年度生数の目標数を20名以下にする。次年度よりベーシックセミナーが始まるので、低学年より出席状況をクラス担任が十分把握し、出席状況の良くない学生に早めに指導するよう心がける。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①例年通り、新宿区と提携して学生が区内小中学校に赴き、ピアサポートとしてスクールカウンセリングの補助を行い、学校現場に寄与した。 ②新宿区特別支援教育事業で巡回指導を行った(専任教員３名)。 （2）今後の課題 ①上記ピアサポート授業を継続する。 ②新宿区特別支援教育事業で巡回指導を継続する。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 今年度は特筆すべき事項はない。 （2）今後の課題 ①平成26年度からの教授会のあり方が検討されており、学部教授会に対応できるような学科内運営を考えておく必要がある。 ②心理士専門職の国家資格化が学会等で議論されており、国家資格化された場合にはカリキュラム変更が必要かもしれない。そのため、国家資格化の方向について多く情報を集めるようにする。 ③教員の健康問題が続いており，学科教員の健康管理及びそれに伴う授業管理を適切に行うよう努めたい。
その他	（1）特筆すべき事項 学科FDにおいてキャリアセンター職員による講演を実施し、学生就職への援助のあり方等を話し合った。次年度の就職支援に役立ったと思われる。 （2）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	人間福祉学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 教員のさまざまな努力や工夫により、学生の教育力向上の授業努力が行われた（具体的な工夫としては、座席指定制、ビデオなどによる映像の活用、プリントの配布やパワーポイントなどの活用、現場の実践者を講義に招聘するなど）。 （2）今後の課題 ３月に新しい社会福祉士制度の最初の学年が卒業したことから、新たな社会福祉士制度のカリキュラムに対応した資格制度の検討を今後新たに進めていきたい。
研究	（1）特筆すべき事項 教員の研究活動が徐々に活発になり始めており、科研費、大学特別研究など積極的な研究費の採択を目指したチャレンジを進めており、その結果として、若手の教員を中心に研究費の採択も増え始めている。平成24年度は本学科教員から科研費１件（継続）、特別研究費２件（継続）が採択された。 （2）今後の課題 ①若手教員は積極的に大学特別研究費や科研費の申請だけではなく、研究の学会発表などを積極的に行うなど、学科会議でさらに強調していく。 ②地域との連携や共同研究などによる教員間の専門性を発揮した研究を推し進めていきたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①1年における個人面談の重視、2年次のキャリアデザインによる面接での個別学生の把握を進め、退学者の減少につながっている。 ②3年次および4年次は、専門セミナーや卒論ゼミという集団で個別的な学生の状況を把握し、就職等の進路に関する個別的な支援を行っている。 （2）今後の課題 ①3年次および4年次における学生指導の充実のため、教員間の情報交換のより緊密性を高めるため、学科内FDの検討を進めたい。 ②新カリキュラムの完成年度以降、合格率の低下傾向に対して、国家試験について新たな指導方針と合格に向けた委員会の検討を進める。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①学科教員が国レベル、地方レベルを問わず各種委員会の主要な役割を果たしてきている。 ②個々の社会的貢献の細目には反映されていないが、各種研修事業や専門職養成に関連した講義や講演活動を積極的に行っている。 （2）今後の課題 学科として地方自治体との協力関係の形成や関係学会との積極的な役割を教員が担うことも必要である。今年度は、さらに、協同研究のできる体制を目指していきたい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科会議開催前に5部門（FD、教務、入試広報、学生、キャリア）での打ち合わせを通して、会議の円滑な運営を行っている。 ②学科内では、学科会議だけではなく、実習委員会、相談演習委員会、就職委員会を個別に開催し、学内と学科全体との調整を進めた。 ③学科創設10周年事業の準備が全教員の役割分担によって進められており、学科としてまとまりのある行事として位置づけられている。 （2）今後の課題 ①学科として、一定のアイデンティティを共有できるような責任分担と役割の自覚を持てるような体制の確立を目指す。 ②今後、学科創設10周年記念事業を契機として、卒業生との連携や学科内の活性化を図る。
その他	（1）特筆すべき事項 新カリキュラムの完成年度とその後に向けた「人材育成PT」を設けて、資格取得だけではなく、学科として学生がどのように学び、卒業していくのかという問題と課題を学科会議で答申し、カリキュラムの一部変更を平成25年度中に行う予定で準備を進めた。 （2）今後の課題 ①学科として、平成25年度のカリキュラム一部改訂（大学の初年時教育との連携を踏まえながら）を踏まえて、CP(カリキュラムポリシー)の新たな方向性の検討を進める。 ②学科開設の新たな10年目として、独自性を発揮できるような活動計画や事業計画を今後も積極的に検討していく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	子ども学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①平成27年度にむけてのカリキュラム検討委員会を設けた。 ②就職率は例年99%近い。社会の要求に応えるべき養成校としての使命を自覚し、今後もこの成果を継続させる。 ③入学定員140名に対し、平成24年度は142名の入学者である。 （2）今後の課題 ①理論と実践に強い保育士・幼稚園教諭・施設職員の育成を目指し、より一層の教員間の連携が望まれる。 ②入試、特に平成25年度から始まる一般入試における面接合格基準の設定、見極めの難しさが課題。 ③学生の要望に応えるべく、施設・用具の管理が課題として残る。 ④学生の個人的な指導の充実をベーシックセミナー・キャリアデザインでいかに実施するかが課題である。
研究	（1）特筆すべき事項 ①科学研究費申請者の増加（平成24年度新規採択1件、継続採択1件） ②産学連携の研究奨励により、産学連携イベントへ本学科教員が自身の研究を出展した。 ③学科内での各教員の著書出版物は37件であった。 （2）今後の課題 ①若手研究者による科学研究費申請の奨励を続ける。 ②学科内での特別研究費対象の研究を奨励する。 ③養成校での産学連携は難しいが、一部それに近い研究があるので奨励する。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①保育士・幼稚園教諭の養成校であることから常にTPOの指導に留意している。 ②学生の自主的な活動である子ども学科特別行事「まみむめめじろかきくけこども」の実施。 ③学科内での挨拶運動の実施。 （2）今後の課題 ①学科所属の教員間で、TPOの指導はじめ、学科特別行事・教科における学科内行事への認識に多少の差があること。 ②学生の個人的な指導の充実をいかに実施するか課題である。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①各教員はそれぞれの専門分野において、各地域での講演会、相談などを通して社会貢献をしている。 ②子ども学科公開講座を実施、社会一般の方々、子育て中の保護者、卒業生を対象に好評を得ている。 ③学科特別行事「まみむめめじろかきくけこども」には近隣の保育所、幼稚園、施設の子どもたちはじめ保護者の参加があり、 高い評価を得ている。 （2）今後の課題 学科特別行事は教科ではないため、全教員の協力と理解が求められることと、例年、実施時期の問題が大きい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科会議の定例化、教員出勤時の押印、挨拶運動への協力など比較的協力が得られた。 ②平成25年度末に人事の異動が多くあることから、平成24年度より対応のための準備に着手した。 （定年退職者2名、自己都合退職者2名、任期満了者2名、及び非常勤講師の任用8件） （2）今後の課題 ①平成26年度は任用人事が多くあるため、平成25年度において円滑な任用業務と学生にとって専門性の高い良い教員を補充する ことが課題である。 ②ベーシックセミナーとキャリアデザインにおける専任教員の配置が課題である。 （平成26年度は全てダブル担任制を用いることを検討する。ダブル担任制の実施には、任用人事が円滑に進むことが前提である。） ③非常勤講師の多い学科としては、労働契約法改正による諸問題が課題となる。
その他	（1）特筆すべき事項 子ども学科の将来に向けての発展と強化のために、特色ある学科作りの検討は必至である。 （2）今後の課題 小動物や草花の飼育栽培は他大学に類を見ないものであり、特色ある学科作りのための教科であることから、今後もこの教科を どう運営していくかが大きな課題である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	児童教育学科

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①教育における現場性と身体性を重視し、各種教育施設訪問、グループ研究、フィールドワークなどの多様な学習活動を展開してきた。 ②児童教育に関わる専門家の育成を指向する学科として、児童理解、各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習・特別活動などについて、それぞれの目的と特性に応じ、実践力の向上を目指した教育を展開してきた。 ③対話力の重要性を共通認識し、対話型授業を各教科の指導において意図的に展開してきた。 ④児童教育の専門家として重要な創造性や感性を高める教育として、体育、美術・音楽教育に取り組んできた。 （２）今後の課題 ①平成24年度は教員採用試験の結果で教員採用者18名となり、多大な成果を収めた。平成25年度も、教職希望者への受験対策, 教職外の進路希望者への基礎的学力の向上など、学生の進路に対応した教育の推進の具体策を検討し、実施していく。 ②教師養成塾、教員採用研修などの最近の各都道府県の施策に対応した学内・学科内対応策を具体化していく。
研究	（１）特筆すべき事項 ①科学研究費２件（研究代表者１、研究分担者１）、学内特別研究費５件を受給することができた。 ②本学紀要に論文４件が掲載できた。 ③８件の学会発表ができた（平成23年度より倍増した）。 （２）今後の課題 ①科学研究費への応募、本学特別研究費の応募数の増加を目指す。 ②学会誌、本学紀要へのできるだけ多数の掲載を目指し、その過程で所属教員の研究者としての力量の向上を希求する。 ③教員養成、教育制度、学習方法など、児童教育学科ならではの研究について学科所属教員による共同研究を推進する。 ④学科構成員の研究・実践を共有するための学内ＦＤを推進していく。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①一人一人の学生の学習・生活状況の把握に努めてきた。このためクラス担任、ゼミ担任による個別面談、グループ面談（昼食会）を実施してきた。また学科会では、学生に関する話し合いの時間を設定し、個々の学生について学科の教員が共通理解し、また問題に協力して対応する体制を作ってきた。 ②学生の社会参加能力を高めるため、ボランティア活動を奨励し、学科組織に担当者を置き、紹介・活動の実施・事後の成果の集約が円滑にできるようにしてきた。 （２）今後の課題 ①現代の学生は、人間関係に苦手意識を持ち、刹那的傾向があり、興味・関心も多彩である。こうした多様な学生たちに社会規律・授業規律を定着させるとともに、その良さを引出し、児童教育の専門家として、人間的基盤を広げるための具体的手立ての検討と実施が課題である。 ②非常勤講師の先生方とも共通認識を深め、協同して学生指導を進めていく。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 各教員の特性を活かし、文科省・国立教育政策研究所関連審議会委員、区教育委員会教育委員、外部評価委員等を担うなど、地域・社会に貢献する活動を行ってきた。 （２）今後の課題 ①学科所属教員の社会貢献活動を、本学の教育、殊に児童教育学科の学生の指導に資するための方策を検討する。 ②各教員がさまざまな教育機関との協同研究に得た成果を学科全体で共有する機会を設定する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 学務運営委員会、教務、入試広報、学生、キャリア、図書の各委員会の内容について学科会で必ず報告し合うようにした。また学科としての要望事項については、事前調整を行ってきた。資格支援センターとの間で教員免許更新制度、実習関係の連絡・調整に努めてきた。 （２）今後の課題 学科の教育活動や業務について全教職員が認識し、共通意識を持って推進していく体制づくりをいっそう進めていく。
その他	（１）特筆すべき事項 ①中野区教育委員会との提携により小学校観察実習を推進してきた。 ②学科新聞を継続的に刊行してきたが、従来の教員主体での発行体制から学生の編集員主体で発行できる体制になった。 ③教育現場の実践者を招聘し、学生の啓発に活かしてきた。 （２）今後の課題 ①平成26年度からの新カリキュラムの実施に向けて準備を進める。 ②各都道府県の教員採用の現状をできる限り正確に把握していく。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	社会学部

(1) 特筆すべき事項

＜教育＞
１．カリキュラムに関して、社会情報学科では平成26年度に向けた新カリキュラムを完成し、メディア表現学科では平成25年度より実施予定のカリキュラムの最終的な点検作業が行われた。地域社会学科では新カリキュラムの策定を行っていたが、諸事情により実施が遅れている。３学科共にカリキュラムの充実に向けて積極的に取り組んだ。
２．授業運営に関して、社会情報学科では本年度開講のベーシックセミナー（入口）と卒業研究（出口）に新しい工夫がなされており、メディア表現学科では学生向けシンポジュームの実施や地域との連携などにより開かれた教育が実践された。地域社会学科では「現場主義」の教育が促進されるなど、３学科の個性化が顕著に表れている。
＜研究＞
１．３学科共に、科学研究費などの外部資金の獲得数が学内の動向と同じく増加しており、他学科と比しても遜色のない状況にあると言える。メディア表現学科では海外学会での研究発表が３件ほどあり、研究成果の対外的な発信がなされた。
２．論文総数に関しては、平均すると各教員１編以上の刊行があり、何らかの形で研究成果が公表されており、特に、メディア表現学科では学会誌への投稿件数12件と増加した。
＜学生指導＞
１．授業の出席不良学生及び成績不良学生に対しては、本人及び保護者との連携により早期の対応がなされた。クラス及びゼミ担任のきめ細かな連絡により退学者及び休学者への効果的な対処がなされた。
２．就活指導に関しては、社会情報学科では毎週「求人リスト」をゼミ時に配付したり、キャリアカウンセラーとのゼミ単位での面談が実施されるなどにより内定率が向上している。各学科での取り組みは違うが、就職内定率の向上への取り組みが積極的になされた。
＜社会貢献＞
１．各学科平均５名程度の学会・協会等の役員がおり、社会的活動に貢献した。
２．連携事業に関しては、学科によるバラつきは見られるが、地域・産学・高大で、各数件程度行われた。
３．その他、高校への出張授業、社会活動などへの講師としての参加が行われた。
＜組織マネジメント＞
１．オープンキャンパス、学びフェスタなどでは、各学科長のリーダーシップにより、学部・学科案内用のパンフレットの作成、相談会場の展示物などの工夫、模擬授業の活性化などが実施され、外部参加者の増加につながった。
２．社会学部３学科の合同事業として、オープンキャンパス向けの「学部及び３学科の紹介パンフ」が作製、配布され、好評であった。
３．社会学部３学科の非常勤講師と専任教員との第１回目の「教育懇談会」が催された。３学科の担当教員が相互に連携して実施されたが、会場の準備、経費、教員間の連絡、当日の進行など、確実に行われ、有意義な懇談会となった。
４．学科運営に関しては、メディア表現学科では全教員に学科マネジメントの当事者意識を促す工夫がなされ、地域社会学科では「地域社会学科年報　第４号」、社会情報学科では「ソシオシリーズ　第11巻」の刊行がなされるなど、学科の運営が円滑になされた。

(2) 今後の課題

＜教育＞
１．基礎学力に欠け、学習意欲の乏しい学生にどのように対処すべきなのか、ベーシックセミナーなどによる対応が必要である。
２．各科目間の連携を図り、学習の相乗効果を高める仕組みを検討する必要がある。
３．学部共通科目の整備と充実化により、社会学部の特徴を教育に反映したい。
４．卒業研究の共同発表等により、学科間の情報共有と学生のモチベーションを促進したい。
＜研究＞
１．研究と教育に費やす時間と労力のバランスを改善する方法を模索する。
２．学内の特別研究費及び科学研究費等の外部資金への積極的な申請を促す。
３．学会誌論文の投稿及び学会発表（学会参加）がスムーズに実践できるような研究環境を整備する。
＜学生指導＞
１．出席不良学生及び学業不振学生を早期に発見し、本人並びに保護者との効果的な対処法を工夫し、休学、退学、除籍等に該当する学生をさらに減少させる。
２．就職の内定率向上のために、就活への意識を高揚し、キャリアカウンセラーの積極的な活用を促す。ゼミ教員による学生との１対１の就活対策が必要である。
３．諸資格が学科を越えて取得できるシステムを検討する。
＜社会貢献＞
１．個々の教員による社会貢献はなされているが、その実績が広く周知されていない節がある。社会学部の特色をアピールする意味でも、個々の実績を統合し、広報するためのシステム作りを検討したい。
２．カリキュラムの工夫により、社会学部共通科目として社会貢献に関係する授業科目を設定したい。
＜組織マネジメント＞
１．学科運営は各学科長の主導により実施されているが、学部という視点からのマネジメントの意識を持ちたい。３学科長と学部長による社会学部会を開催しているが、学科間の情報共有と問題意識の連帯感を育みたい。
２．FD研修会、全学的な講演会などへの積極的参加を促す。
３．社会学部非常勤講師と専任教員による「教育懇談会」を継続する。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	社会情報学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①「学びのフレームワーク」を作成し、AP・CP・DP、科目の順次制に即したカリキュラム（平成26年度から）を完成させた。 ②AP・CP・DPを完成した。 ③ベーシックセミナーの開設を準備した。 ④「卒業研究」の合否判定に新たな工夫を加え、運営の改善に努めた。 ⑤アクティブラーニングに積極的に取り組む教員が見受けられた。 ⑥フォローアップセミナーを開催し、一般入試過去問の解き方、新聞記事の要約法などを指導し、他日、提出させ評価した。 （2）今後の課題 「卒業研究」の質的向上と公正な評価方法を検討する。
研究	（1）特筆すべき事項 ①教員スタッフの研究成果が上がった。論文の延べ件数は10件、刊行図書の延べ件数は15件、学会発表は13件であった。 ②平成24年度に採択された科研費の給付は新規採択1件、継続採択1件、特別研究費の継続採択は3件であった。 ③学科誌『ソシオ情報シリーズ』第11号「未体験ゾーンに突入した日本」を刊行し、11名の学科教員が寄稿した。 ④社会問題や社会調査の分析と提言、また文献資料の解読や情報機器を使って現地調査に取り組む教員が多く見受けられた。 ・桐和祭で学科講演会「原発事故を巡る日本社会の対応」（前拓殖大学教授・松井幹雄氏）を開催した。 ・奥日光の立ち枯れ観測 （2）今後の課題 教員にとっての十分な研究活動（学会参加・論文作成）の実現を期したい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①問題のある学生への情報の共有により、適切な指導ができた。 ②成績・出席不良学生には、クラス・ゼミ担任のコメントつき成績表を送付した。 ③就活相談会を週1回実施し、「内定がとれそうなオススメ求人リスト」を週1回発行した。内定率94.9%（3/31現在）。内定率向上のためのキャリアカウンセラーとの面談をすすめ、保護者のための就活相談会を開催し、ゼミ担当者による保護者面談に応じた。 ④諸資格取得希望者への受験指導と集中講座を実施した。秘書検定2級29名、3級24名、販売士2級7名、フードスペシャリスト検定16名が合格した。 （2）今後の課題 学生の自立心を養う指導をめざす。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①公共性のある講演・マスコミ取材に応ずる教員が多くみられた。 ②学会役員を引き受け、社会貢献事業に携わる教員も多かった。 （2）今後の課題 特になし
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①FD研修会には3回とも助教以上全員が参加した。 ②学科内の共通認識を得るために、『ソシオ情報シリーズ』刊行を続行した。 ③オープンキャンパスのための学科PR内容を刷新した。 ④第1回社会学部非常勤講師懇談会を開催した。学科教員は全員、学科所属の非常勤講師は7名出席であった。 （2）今後の課題 FD研修について学科の取組みを再組織し、ベーシックセミナーの内容と運営を検討する。
その他	

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	メディア表現学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①平成25年度より実施予定の新カリキュラムの最終的な点検作業を全教員で行った。 ②学科主催で学生向けシンポジウム『著作権・肖像権』を、２人の外部パネリストを招聘し、開催した。 ③ケーブルテレビ向け番組を学生と共に制作し、落合地域の振興の一翼を担った。 ④インターンシップの会を継続実施するとともに、新たに成果報告書をまとめ、関係者に送付した。 ⑤授業での創作作品を外部のコンペに出品させ、奨励賞を受賞させた。 ⑥学科内で、成績評価の基準について率直な意見交換をし、学生に対し不公平のない体制作りをした。 （2）今後の課題 ①各科目間の連携を強め、学習効果の相乗効果を高める仕組み作りをしたい。 ②生活態度が乱れ、なげやりな学生をいかに学習へと誘導するか、学科としての取組みを強化したい。
研究	（1）特筆すべき事項 ①海外学会での口頭発表が相次いだ。 ②学会誌・紀要その他への投稿、書籍刊行など、平成24年度は学科教員の研究・執筆活動がきわめて盛んだった。特に若手教員の持続的な努力が際立った。 ③若手教員3名の外部資金導入・科研費獲得に見るべき成果があった。 ④教育の領域にも入るが、学科教員全員による共著作『メディア表現学』の構想が生まれ、実現の方向で動いている。 （2）今後の課題 ①学科教員の一層の科研費の獲得を目指したい。 ②教育目的ばかりでなく、研究にも狙いを定めた学科主催のシンポジウムを開催したい。 ③最も校務が集中している40代後半教員の研究時間の確保、研究意欲の向上に向け工夫をしたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①全教員が保護者と連携して、登校低迷学生の学習意欲を高める努力をした。 ②少人数制でのベーシックセミナー実施に向け、学科全員で意思統一をはかり、退学者・休学者の減少に努める方向性を確認した。 ③巨大ゼミを解消し、学生一人ひとりに目が届く学科の専門教育体制を整えた。 ④フレッシュマンセミナーをフォローする１年生の集まりを開催し、目白大学生としての自覚を強化した。 （2）今後の課題 ①就職内定率が80%ぎりぎりと他学科に比べて低く、進路指導に解決すべき問題が多々ある。 ②教員によって学生対応に差がある。学生の不利益にならないような仕組み作りが必要である。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①電子メディア教育の小学校への導入に関し、社会的活躍が目立った。 ②文化財のデジタル化につき一定の貢献をした。 ③地域の社会福祉法人の役員を務め、地域の福祉向上に一定の役割を果たした。 ④外部組織からの依頼により専門領域のアドヴァイスや講演をし、地域・教育機関の教育的・文化的環境作りに寄与した。 （2）今後の課題 メディアを専門とする学科として、地域のメディア化を落合地域を対象に検討し、学科としていかなる地域貢献ができるか、考える必要性を痛感する。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科教員それぞれが学科マネージメントに当事者意識を持って臨めるような仕組み作りをし、以下の成果を上げた。 1）学科内に小ワーキンググループを課題ごとに設け、小回りのきく体制で学科の抱える問題点をチェックし、できるところから改善の努力をした。 2）「学びフェスタ」で学科の全教員が模擬授業を行い、学科の広報に資するとともに、教員の当事者意欲を高めた。 3）学科の健全存続のため、入学者が予想される高校に向けた学科独自広報に努めた。 ②上記の試みの結果、一昨年度入試不調をわずかながらも挽回し、志願者増につなげた。 ③学科会を、ルーチーンの校務確認の場から、全員での問題抽出・問題解決の場へと変化させた。 ④学部での連携業務として非常勤講師の会を開催したが、平成24年度は本学科が中心となって企画を進めた。 （2）今後の課題 学科教員一人ひとりが学科を支えているという明確な当事者意識を持てる仕組み作りが必要であると痛感する。
その他	（1）特筆すべき事項 本学非常勤講師・大高幸氏（アーツ・マネジメント担当）、図書館長、学術情報グループの協力を得ながら、学科教員２人で図書館の稀覯資料を披露するミニ展示会開催（於：目白大学新宿図書館）を支援し、学生の学習の幅を広げた。 また、落合地域の住民にも展示を公開し、あわせて関連の講演会を開催し、目白大学の地域貢献の一助とした。 （2）今後の課題 過去の経緯、本学科のメディア専門教育と設備環境などの理由で、「目白大学新聞」「めじてれび」提供番組を本学科で制作している。2年前から学務運営委員会や教授会で記事・企画募集をしているが、反応はゼロである。大学の広報やブランド力に関わる部分もあるので、何とか2つの媒体のための企画・制作を全学に開かれたものにしなければならないと考えている。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	地域社会学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①本学科の教育理念の柱であるフィールドワークに、教員各自がプロジェクトリーダーとして労力と時間をかけて取り組んだ。 ②「現場で学び、現場から学ぶ」をモットーに、社会の諸問題を発見し解決する能力を養う「現場主義」の教育に取り組んだ。 ③受講シート、プリント配布、報告書作成、新聞や映像の利用、グループワーク等学生の関心を引き出し理解を深める工夫をした。 ④ベーシックセミナーの実施に向けて、担当教員を中心にミーティングを重ね、授業計画を策定、運営方針を確定した。 （2）今後の課題 ①基礎学力や学習意欲に乏しい学生の割合が増加する中、社会について基礎から学び、社会を生き抜く力を身に付ける教育にシフトして行く必要がある。 ②教職、学芸員、環境マネジメント実務士、観光ビジネス実務士、社会調査士、世界遺産検定、東京シティガイド検定、エコ検定等、資格取得や検定合格のためのテコ入れが必要である。 ③卒業論文の中間報告会はすでに学科のイベントとして定着しているが、ゼミごとに取り組みがさまざまであり、分科会ごとに指導法もまちまちである。
研究	（1）特筆すべき事項 ①科学研究費補助金が5件採択された。このうち1件は平成24年度からの新規採択で、科学研究費助成事業への申請が2件あった。 ②論文執筆、学会発表、ともに昨年度と同程度だが、特に若手教員が、校務の傍ら研究活動でも成果を残してくれたことは大きい。 ③業績発表には至らなくとも、資料収集、史料読解、現地調査、学会出席等、個々に成果は見られたようである。 （2）今後の課題 ①学生指導や事務対応に費やされる時間が年々増加し、夏休みや春休みの休暇も短くなる一方で、研究に充てられる時間が年々削られていくことに対する焦りの声を聞く。 ②平成24年度も平均1～2本の論文発表にとどまり、前年度よりも業績がやや少なくなったようであり、研究活動のための環境整備が必要である。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①卒業要件未充足者が18名（4年生11名、留年生7名）。このうち半分近くはあと一息で卒業であり残念であった。 ②キャリアセンターとともに進路指導委員を中心とする指導が功を奏して、学科の就職内定率は86.4%であった。 ③自治体や事業所でのキャリア研修・インターンシップや、地域でのボランティア活動・イベントへの参加を促した。 （2）今後の課題 ①地域社会学科の開設から7年、退学者・除籍者は以前よりは少なくなったが、学習意欲の乏しい学生が目立つ。 ②学生のキャリア意識や就職意欲をもっと高め、今後は就職希望者数自体をさらに増加させることが課題である。 ③学業不振学生の保護者には成績表に手紙を同封して状況を伝えているが、今後もきめ細かな対応を心がけたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①公開講座「第5回地域フォーラム」を開催し、観光庁次長や地元ボランティア団体代表者をパネリストとして招き、地域住民との対話の機会を設けた。 ②戸田市の寄附講座「地域政策の開発」を実施するとともに、同市とのコラボレーションでまちづくりに関する共同研究を行った。 ③イベント「染の小道」に学科として参加し、学科学生を3日間で約60名動員して、中井・落合地区の社会貢献活動を担った。 ④新宿区、品川区、練馬区、中央区、さいたま市、長野市、大阪市等、各地で教員が専門性を活かした社会貢献活動に取り組んでいる。 （2）今後の課題 ①まちづくり、観光開発、地域政策、環境教育等の諸分野にわたる活動促進のため、今後も他の自治体、企業、NPO等とのコラボレーションを積極的に探っていきたい。 ②地域連携・社会貢献は、各学科が実践・模索していると思われるので、地域連携・社会貢献センターのような全学的組織を立ち上げて情報を一元化することが望ましい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①本学科のゼミ活動、フィールドワーク、学生の成果等の記録を中心にまとめた「地域社会学科年報」第4号を刊行した。 ②桐光会運営委員2名を選出し、学科「保護者会」を2回（7月と1月に）開催し、全体説明、レクチャー、個別相談を実施した。 ③フレッシュマンセミナーでは、フィールドワークとプレゼンテーションを中心に充実した学科プログラムを展開することできた。 ④専任講師と助手が突然退職することになり、十分な募集期間を取ることができなかったが、優秀な後任を採用することができた。 （2）今後の課題 ①辛うじて定員割れこそ回避したものの、非常に厳しい入試結果であった。今後は入試広報戦略の徹底的な見直しが不可欠である。 ②問題学生の対応、就活支援の強化、地域連携の拡大、学科の情報発信など、今後もさらに努力を続けていきたい。 ③第1回社会学部合同非常勤講師懇談会が開催され、非常に有意義であったが、本学科所属の非常勤講師の出席は1名のみであり、教員間の連携強化の必要性が再認識された。
その他	（1）特筆すべき事項 ①専門分野に相当な業績を持つ教員スタッフが各自、学科のポリシーの実現に尽力している点は、大いに評価できると思われる。 ③新3号館への研究室移動を機に、ルーズになりがちだった資料室（地域村）の整理整頓、及び備品や書籍の管理が強化された。 （2）今後の課題 ①現行のカリキュラムと学科のポリシーとの不整合性が認められるので、カリキュラムの改訂が必要である。 ②カリキュラムの改訂は厳しい入試結果を踏まえて、学科のポリシーの見直しにまで踏み込まざるを得ない。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学部

（１）特筆すべき事項

①　教育

１）多くの学科教員が卒業研究やキャリア科目などに積極的かつ主体的に取り組み多大な努力を傾注し、一定の成果を達成している。

２）他大学とのインターゼミナールをいくつかのゼミナールで実施しており、他大学との学生による研究交流を促進している。

３）あるゼミナールでハラスメント問題が発生したが、ゼミナールや担当授業科目に対する対応措置について学科全体の協力のうえで解決することができた。

②　研究

１）多くの教員が学会における重要な役員を担い、社会的研究活動に貢献している。各教員が研究計画に沿って発表や論文発表を活発に行っている。

２）各教員は、この忙しい公務のなかで学会における研究に努力している。

３）科学研究費１件、学内特別研究費２件の獲得実績をあげた。

③　学生指導

１）各ゼミナールにおける指導教員が学生の就職活動を絶えずモニターし指導するとともに、キャリア担当教員に報告する体制を整備することによって、就職の改善に努力した。

④　社会貢献

デミング賞選定委員会副委員長や独立行政法人学位授与機構学位審査会専門委員を務めるなど、専門性の高い社会活動に貢献している。

⑤　組織マネジメント

学部学科運営で会議における民主的かつ効率的な運営に重点を置き、特に人事に関する事項について構成員の合意に至るデュープロセスの確立を重視した。

⑥　平成24年度は学部学科運営の正常化が最大の課題であった。

（２）今後の課題

①　学部学科におけ運営体制をさらに制度設計し適切な運営を図ること

②　入口・中身・出口の一体改革への努力（経営学部経営学科「中長期計画」の策定とその実施）

③　初年度教育、特にベーシックセミナーの工夫改善

④　進路に関する学生の個性に即したきめ細かな指導体制の整備・充実

⑤　入口別の入試戦略の策定・強化及び入学者確保への努力の傾注

⑥　学生のニーズに応えるための公開講演会、ＳＰＩ対策講座、資格取得の支援、就活支援の強化・充実

⑦　科学研究費、学内特別研究費などの競争資金の獲得に対する対策の策定

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	経営学科

項目	自己評価
教育	（1）特筆すべき事項 ①マーケティング・コース所属のゼミナールを中心に企業や他大学と共同でプレゼンテーション大会を企画・実施している。5年目となる平成24年度は株式会社電通の協力を得て、江戸川大学所属のゼミナールとの間でプレゼン競争を行った。 ② マーケティング・コース所属のゼミナールが東洋大学・愛知淑徳大学共催のディベート大会に出場した。 （2）今後の課題 平成27年度の実施を目指す学科「中長期計画」の策定を行っており、この一環として学科のコース制の見直しと、これに連動したカリキュラムの見直しを進めていく。また、学生の資格取得支援も充実を図る。平成25年度から導入のベーシックセミナーでも学科統一の教育内容を推進して、学生が興味を持って主体的に学習に取り組める体制を充実させる。
研究	（1）特筆すべき事項 全体として、各教員の研究計画に沿った学会発表や論文発表が行われている。平成23年度は0件だった科学研究費獲得実績が、24年度は1件ではあるが、研究分担者として獲得に至った。また、学内特別研究費も2件の獲得実績があった。しかし、一方において教員の学内業務負担の増大に伴い、一部の教員において研究時間の圧迫が顕著に起きている。 （2）今後の課題 教育内容の質の充実や社会貢献を推進する上でも、各教員が互いに助け合うことができるような研究の促進・支援体制を整備拡充を図っていきたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①学内外における行動において社会的規範を順守する意識の欠ける学生が一部存在した。具体的には学生の路上喫煙や不正な出席登録の問題が発覚した。 ②就職率と就職の質を改善すべく、多大な努力を払った。とりわけ平成24年度はゼミナールの指導教員に学生の進路状況を常にモニターし、キャリア委員に逐次報告することを制度化し、進路指導の徹底と学生への仕事への意欲付けを図った。 （2）今後の課題 ①初年次教育等において、機会をとらえて社会的なルールを順守し、責任ある行動をとるよう指導する。 ②学生の進路について、学生の個性に即したきめ細かい具体的な指導を強化していきたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 教員ごとに独立して社会貢献活動を行っている。総合品質管理の進歩に功績のあった企業や個人に授与されるデミング賞の選定委員会の副委員長や独立行政法人大学評価・学位授与機構における学位審査会専門委員を本学科の教員が務めるなど、個々の教員がそれぞれの高い専門性を活かした公益性の高い社会活動に寄与している。 （2）今後の課題 学科全体として社会貢献活動を推進、支援する体制を整える。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 学科運営の正常化に資するために、学科会議を公正かつ効率的に運営するための運営ルールを策定し、また学科内において人事ルールを明示し試行した。特に、学科会議の運営では、構成員全体で審議し合意に至るデュープロセスの確立を重視した。いずれも、平成23年度以前から本学科で組織マネジメント上の課題とされていた問題であり、一定の進歩があったと言える。 （2）今後の課題 学科運営について、できるだけルール化するとともに、民主的かつ効率的で弾力的な運営を可能にすることによって、各教員が研究や教育に努力を傾注できる体制を作っていきたい。
その他	（1）特筆すべき事項 平成24年度は学科運営の正常化が最大の課題となった。 （2）今後の課題 学部「中期計画26」と連動する形で学科「中長期計画」を策定し、実施することで教育と研究の充実を図る。学部の中期計画26とは別に策定を計画している学科の中長期計画は、学生のニーズに応じたカリキュラムを準備し、学生の将来に応じて履修科目群を選択できるように工夫している。また、この中長期計画の合意に基づいて人事計画を策定し、教員の新規採用人事を推進する。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	外国語学部

（１）特筆すべき事項

＜教育＞

活動事例として、①交換留学制度に基づく学生の海外派遣（韓国語学科）、②１学期間のセメスター留学(Power English）の実施（英米語学科）、③台湾研修での日本語教育実習の事前指導、実施、実施後の連携的振り返り活動の実施（日本語・日本語教育学科）、④学科所属教員全員による、夏季合宿での現行カリキュラムの検討と、これに基づくカリキュラムの改正（中国語学科）、などが挙げられる。

＜研究＞

活動事例として、①科研費等に基づく旺盛な執筆活動や、国立台湾図書館主催のシンポジウム「近代東アジアと台湾」での口頭発表（中国語学科）、②海外での学会等への積極的な参加（韓国語学科）、③*Lingua*や*Journal of Psycholinguistic Research*等の一流国際誌の論文査読委員としての活動（英米語学科）、などが挙げられる。

＜学生指導＞

活動事例として、①日本山西省交流友好協会主催の中国語弁論大会での優勝と、これによる床次徳二記念賞受賞学生の輩出（中国語学科）、②きめ細かい学生指導の実施（例えば、韓国語学科では学生を12名程度の小グループに分け、学業や生活面での個別指導を実施、英米語学科でもベーシックセミナー担当教員、クラス担任、ゼミ担当教員、コア・プログラム担当教員によるきめ細かい指導を実施）、③キャリアデザイン授業の改善とベーシックセミナーの企画・運営への協力（日本語・日本語教育学科）、などが挙げられる。

＜社会貢献＞

活動事例として、①NPO「中国山地の人々と交流する会」理事の鐙屋一教授の中国山地での教育活動への支援（中国語学科）、②教員免許更新制度に基づく講習の実施（韓国語学科）、③日本在住の外国人の子弟を対象とする日本語学習の支援（日本語・日本語教育学科）、④日本青少年文化センター評議委員としての活動（英米語学科）、⑤実用英語技能検定試験委員としての活動（英米語学科）、などが挙げられる。

＜組織マネジメント＞

本学部の組織マネジメントに関わる特筆すべき活動事例として、「英米語学科教員会議の運営に関する内規」に基づく民主的な学科運営（英米語学科）、などが挙げられる。

（２）今後の課題

＜教育＞

本学部の課題として、①学位授与の方針の更なる明確化と、順次性・体系性を備えたカリキュラムの再構築、②学生のニーズの把握と、社会力涵養のためのきめ細かい指導を可能とする体制の整備（韓国語学科）、③「ベーシックセミナー」の学習成果の検証（日本語・日本語教育学科）、などが挙げられる。

＜研究＞

本学部の課題として、①科学研究費補助金等への申請率の向上を図るための方策の検討、②全国レベルの学会誌や国際誌への投稿数（掲載数）を増やす努力、③学会での諸活動への積極的な参加を促す学内措置の検討、④授業数や業務負担の増加による研究時間の削減に対する改善策の検討（特に韓国語学科）、などが挙げられる。

＜学生指導＞

本学部の課題として、①学科長・ベーシックセミナー担当教員・クラス担任・ゼミ担当教員等の緊密な連携による組織的な指導体制の確立（英米語学科）、②就職支援体制の確立、③教育実習生の抱いている「古典文法」への強い不安感を払拭するための具体的措置の検討（日本語・日本語教育学科）、などが挙げられる。

＜社会貢献＞

本学部の課題として、教育研究の成果を高大連携事業等を通して社会に還元していく努力、などが挙げられる。

＜組織マネジメント＞

本学部の課題として、①透明で公正な学科運営の更なる追求（英米語学科）、②学生定員充足のための具体的方策の検討（中国語学科）、③有期教員の再雇用の際の無期への変更を含む雇用条件の改善（特に中国語学科・韓国語学科）、④研究時間確保のための具体的方策の検討（特に韓国語学科）、などが挙げられる。

＜その他＞

その他の課題として、①教員側の都合を重視した教育ではなく、学生側の立場に立った教育を行っていくようなお一層努力する必要があること、②入学定員の安定的な充足を図るための具体的方策を検討する必要があること（中国語学科）、③学科間でのより緊密な連携と、外国語学部としての一体的な運営を含む、夢のある中期目標・中期計画を策定する必要があること、などが挙げられる。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	英米語学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①1学期間のセメスター留学（Power English）による実践的語学教育を実施している。 ②多くの外国人教員を活用した発信型コミュニケーション能力の育成に注力している。 ③1・2年次生を対象とするコア・プログラムの実施により、英語の4技能のさらなる伸長を図るようにしている。 ④4年次の卒業研究を実り多いものとするために、少人数のゼミ指導の徹底を図っている。 （2）今後の課題 ①学位授与の方針（育成すべき人材像、獲得すべき知識・能力等の付加価値、達成すべき教育目標など）を明確化する必要がある。 ②順次性のある体系的なカリキュラムを構築していく必要がある。
研究	（1）特筆すべき事項 ①LinguaやJournal of Pshycholinguistic Research等の一流の国際的学術誌の論文査読委員を務めた教員がいる。 ②平成24年度の科研費採択結果は新規採択1件、継続採択1件であった。学内の特別研究費採択は0件であった。 （2）今後の課題 ①科学研究費補助金への申請率を上げる必要がある。 ②全国レベルの学会誌等への投稿数（掲載数）を増やす必要がある。
学生指導	（1）特筆すべき事項 クラス担任制度、ゼミ指導、コア・プログラム等を通じてきめ細かい指導を実施している。 なお、就職状況については、就職希望者55名中内定者42名で、内定率76.4%であった。 （2）今後の課題 学科長、クラス担任教員、ゼミ指導教員等の緊密な連携による組織的な指導体制を確立する必要がある。 また、学科内のキャリア支援委員会を中心に、ゼミ担当教員とも連携しながら、就職率のさらなる向上を目指す。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①日本青少年文化センター評議委員、実用英語技能検定試験委員等を務めた教員がいる。 ②小・中・高校教師、大学講師、塾・英会話講師、英語教育に関心のある方を対象に、学内で公開シンポジウム「日本の英語教育を発信する（第5弾）」を開催した。 （2）今後の課題 教育研究の成果を、例えば高大連携事業を通して、社会に還元していく努力をもっと積極的に行っていく必要がある。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 特になし。 （2）今後の課題 透明で公正な学科の運営を心掛けていく必要がある。
その他	（1）特筆すべき事項 特になし。 （2）今後の課題 教員の都合を重視した教育ではなく、学生の要望や実態に適切に配慮した教育を行っていくように努力する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	中国語学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 学科所属全教員参加の下、夏季休暇を利用して合宿を行い、現行カリキュラムについて検討した。その成果を受けて、平成25年度新入生から適用される「中国言語」カリキュラムの改正を行った。時代の要請に応えるべく、資格取得と運営能力向上をより重視した科目編成を行い、「検定」「翻訳」「通訳」「プレゼンテーション演習」等の科目を増設或いは新設した。また、留学終了後の学生に本学開講科目をより多く履修させるため、「中国語学留学１～４」を新設した。 （2）今後の課題 昨今の日中関係の悪化もあり、定員充足に苦しんでいる。質、量ともに優れた学生を養成するため、より魅力的なカリキュラムと授業を提供していくため、学科所属教員一人一人に不断の努力が求められている。
研究	（1）特筆すべき事項 胎中千鶴教授の科研費、特別研究費による旺盛な執筆活動、国立台湾図書館主催のシンポジウム「近代東アジアと台湾」における口頭発表などは学術的貢献はもちろん、本学の知名度向上にも大いに貢献している。黄丹青准教授も科研費による研究「国際バカロレアによる日本型公立高校モデルの構築に関する実証研究」のメンバーとして、中国での現地調査の責任者を務めた。 （2）今後の課題 学会の諸活動への積極的参加を促す学内的な措置が必要。
学生指導	（1）特筆すべき事項 学科として各種中国語弁論大会への参加を勧めており、日本山西省交流友好協会主催の弁論大会で平成23年度に優勝した学生が、学科として初めて床次徳二記念賞を受賞した。また、平成24年度の同大会（11月）でも学生１名が準優勝、２名が入賞を果たした。続く12月に開催されたJAL中国語スピーチコンテストにも本学科から3名の学生が出場した。 （2）今後の課題 平成24年度の就職内定は決定が時期的にも遅れ、最終的な就職内定率も満足できるものではなかった。ゼミ等を通じての就職活動支援も強化していく必要がある。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 NPO「中国山地の人々と交流する会」理事でもある鐙屋一教授の中国山地教育活動支援のための継続的活動。 （2）今後の課題 在学生に出身高等学校の先生宛の手紙を書いてもらい、大学での学習・生活状況を報告してもらう。当面は積極的に賛成してくれる学生のみを対象とし、担当教員の手紙も同封する。高大連携の一助となることを目的とするものである。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 人事面での有期教員の任期無しでの更新。最少人員で学科の運営に当たっていることもあり、安定した学科の運営と教育の質のさらなる向上のためにも、現員全員の「任期無し」を実現することが喫緊の課題である。
その他	（1）特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 入学定員の安定的な充足。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	韓国語学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①前年度に引き続き、1年生の基礎韓国語の能力を向上させるために初年次教育の強化の一環としてより効果的な教育が実施できるように教材作成や教育方法などをを改善するように努力した。 ②学生のキャリア教育や進路指導のためにプログラムを計画し、徹底的に指導し、就職率アップに全力を尽くした。 ③海外に交換留学している交換留学生やD.D生の指導のためにキャリア教育の遠隔指導を行った。 （2）今後の課題 学生のニーズを随時に確かめ、学生が力を付け社会力を持つように、きめ細かい指導をするためにシステムを作る必要があると思われる。
研究	（1）特筆すべき事項 ①海外の学術大会に積極的に参加し、研究活動の幅を広めるように尽力してきた。 ②専攻としての「韓国語」の教育を特化するために、教材制作に力を入れている。 （2）今後の課題 ①研究力をアップするため専任教員の確保が必要。 ②雑務が多すぎるので研究に専念することすらできない状況である。改善する余地があると思う。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①1年の担任のみではなく、指導教授システムを取り入れ、学生を12名程度に分け、個別に学業や生活相談などを通じきめ細かい指導を行っていた。 ②2年次生はほぼ全員留学中であるが、キャリアデザイン等の授業を遠隔で行う。そのほか、担任と協定校担当の教員が頻繁に連絡を取り合い、学習や生活指導を行っていた。 ③3年次生と4年次生には、就職について積極的な姿勢を持つように、学科全体あるいはゼミを通して徹底した進路指導を行っている。 （2）今後の課題 さまざまな面において、学生と身近に接触し、きめ細かい指導をするためにシステムを作る必要があると思われる。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①例年と同じく、教員免許更新制度の講習を担当し、小・中・高の教員に韓国語及び韓国文化を広めると同時に目白大学の韓国語学科の存在もアピールした。 ②学園祭に参加し、教員の指導のもとで学生と一緒に韓国の食文化を地域住民に伝えようとした。 （2）今後の課題 社会貢献のために積極的に動く必要があると思われる。学科の方針では、高校出張授業などを積極的に受けるようにしている。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 例年と同じく、学生指導や教育においては教員が率先して動いている。学科運営に大きな問題はないと認識している。しかし、研究に力を入れるような環境作りに努めなければならないと思う。 （2）今後の課題 教員の人数が少ないので雑務や学生指導に追われ、研究に取り組む時間がないので問題があり、不満もある。改善すべきと思う。
その他	

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	日本語・日本語教育学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①台湾研修で、日本語教育実習の事前指導、実施、実施後の連携的振り返り活動を実施し、大きな成果を得た。 ②卒業論文指導、および修士論文指導では当然の論文執筆指導に加えて、さらに執筆後のプレゼンテーション力をつけることにも配慮し、発表力向上を応援、指導した。 ③高等学校での「出張授業」(2件)を行い、好評だった。 （2）今後の課題 ①新設の「ベーシックセミナー」の教育成果と経過観察・報告が必要と思われる。 ②平成24年度より今まで任されていた教職担当者の対応に変更があった。今後は、より「教育実習」生への科内対応と支援に時間と努力が必要と思われる。 ③平成24年度は卒業生で本学科のインターンシップを果たした学生が中国の大学教員(院修了生)に、あるいは日本語学校の教員に就職できた。今後はさらに、日本の中学・高等学校校教員の狭き採用の門戸をくぐりぬけ、教員となれることを支援したい。
研究	（1）特筆すべき事項 ①学科教員が著書2点を刊行した。 ②研究論文の発表は8件であった。 ③研究発表は6件であった。 （2）今後の課題 実施した研究発表を引き続き論文・著書としてまとめたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①キャリアデザイン授業の改善を図り、ベーシックセミナーの企画・運営に協力したこと。 ②学内外の就職セミナーの連携と連絡により学生への支援・指導を行ったこと。 （2）今後の課題 ①教育実習をする学生が、「古典文法」への強い不安感を抱いていることがわかったので、授業外のボランティア的指導体制で、現在、その指導を行っている。あるいは古典文法学習クラスを設置することも、今後、検討されるべきかと思われる。 ②3・4年次生のゼミにおいて、学修指導のほか、就職活動に鑑み、即戦力としての基盤となる「マナー教育」も必要と思われる。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①進路指導研究会にて「大学大衆化時代初年次教育の実際」のテーマで学習塾の教員12名を対象に、目白大学「表現演習1」の授業参観に協力し、高い評価を得た。 ②東京海洋大学におけるSHIEN研究会にて、「表現演習の実践」からアクティブラーニングを成功させるために必要な要素は、というテーマで発表し他大学の教員から高い評価を得た。 ③武蔵野大学授業研究会（3/16）に出席し、同大学3年次生の国語教職希望者作成の教材研究、授業計画に対して指導・助言をした。 ④静岡大学舘岡康雄教授研究会シンポジウムでパネリストを務め、「教育とSHIEN」と題して発表した。 ⑤国際交流協会主催の日本語ボランティア養成講座の講師として社会貢献をした。 （2）今後の課題 特になし
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①ベーシックセミナー委員会員として、「テキスト」を作成、刊行した。 ②日本語教育センターの日本語教育に協力しながら、日本語教育の学部学生・大学院生にも関心を抱かせ、その実情と問題点把握に協力した。 ③目白大学全学FD研修会で「効果的なアクティブラーニングの実践例」としてパネリストを務めた。 ④目白大学第3回FD研修会（3/5、3/28）の2回にわたって「ベーシックセミナーにアクティブラーニングを取り入れた場合」の授業例をシミュレーション発表した。 ⑤日本語教育センター長・留学生別科長として、さまざまな留学生の相談に対応し、必要な支援に努めた。また、センターのスムースな運営に心を配った。 （2）今後の課題 次年度（平成25年度）からベーシックセミナーがスタートする。「大学における初年度教育」のあり方を模索し続けてきたが、よりベストな成果を稔らせたい。
その他	（1）特筆すべき事項 学科として、国語科教員、日本語教員として活躍する人材を増やしたいので、そのための教育に力を入れたい。 （2）今後の課題 今後は、学部単位での、より親密な連携が必要になると思われる。目白大学の未来像創造を念頭に、長・中期計画も構築される必要があろう。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	保健医療学部

（１）特筆すべき事項

３学科の運営を尊重しながら、月1～2回の定期的な学部・学科連絡会、7月、12月、3月に学部教員会議を行って、学部としての共通理解を図り、協同活動を促進した。平成24年度の活動は以下の通り。

①学部教育について

○退学者、休学者の増加を問題点として認識し、各学科で早期発見と対応に取り組むとともに学科間での情報交換に努めた。

○実習施設について関東地域など近隣施設の比重を高めた。各学科とも円滑な学外臨床実習のため、客観的臨床能力試験（OSCE）を導入して事前教育の向上を図るとともに、実習中は担当教員による実習支援体制を強化して、実習不適応者への減少に努めている。

○平成24年度より「チーム医療演習」を３学科共同の３年次履修科目とし、グループでの症例検討および報告を問題基盤型学習（PBL）方式で行う体制を整備した。

②入学試験における定員確保

○PTの受験者の漸減、OT、STの低迷を認識し、平成23年度作成のリハビリテーション職種の紹介DVDを高校訪問等で活用した。作業療法学科、言語聴覚学科ではオープンキャンパスで特別体験プログラムを実施して受験生確保に努め、入学者は前年度より増加、定員未達成学科はなくなった。

③国家試験および就職に関わる対策

○国試対策委員会を年間５回実施して情報交換を密にしてきた。各学科内での指導体制を強化して熱心に取り組んだ結果、３学科とも全国平均を大きく上回る新卒生合格率90％を越える成果を得た。特に言語聴覚学科は100％を達成した。また国試合格者では就職率100％を維持している。

④研究について

○学部教員の研究意欲は高く、学会発表、学会誌等への投稿も学科により差はあるが総じて高いので、それに応じて特別研究費、科研費等申請率も高める必要がある。ただし実習支援、国試支援等により若手教員の勤務時間は長く、研究時間確保が岩槻キャンパス共通の課題である。

⑤社会貢献について

○目白大学クリニック（現・目白大学耳科学研究所クリニック）における耳鼻咽喉科診療及び言語聴覚療法に関わる臨床活動は引き続き発展し、地域医療に大きく貢献している。大学附属クリニックとして特色ある診療活動を重視する方向への質的転換を図っている。

○前年度より岩槻区役所、さいたま市社会福祉協議会岩槻事務所等と地域連携について協議を行っている。平成24年度から協力事業の一つとして、作業療法学科主導で目白発達研究会の活動を夏期休暇中などに活発に実施した。

○さいたま市と目白大学共催の公開講座「暮らしにいかすリハビリテーションの知識」（18時間）を３学科共同で開催し、定員を超える参加者から好評を得た。

（２）今後の課題

○基礎教育科目については、医療系学部における教養科目のあり方も含め、大学全体での基礎教育の考え方との整合性の検討も必要。専門科目では３学科共同のチーム医療演習での協力体制はできたが、質の向上を図るとともに今後は看護学部との連携・協力の検討が必要である。

○国家試験対策は成果を上げ、合格率をかなり向上させ、初めて新卒合格率100％を達成した。この成果の維持と更なる向上を目指して、教育推進室を活用した組織的な支援体制を整備したい。受験生の確保に関しては、特別体験プログラムの継続、近隣高校訪問など、入試・広報グループと協力して更なる努力・工夫を続けたい。

○研究面では、学会発表等､日常行っている研究活動を科研費研究等への申請につながるよう学部教員を促していくとともに、研究環境の改善、研究時間の確保について事務局とともに検討することが必要と考える。

○社会貢献に関しては､目白大学耳科学研究所クリニックの地域貢献にとどまらず、目白大学発達研究会の活動を具体的な第一歩として、今後さいたま市や岩槻区との連携をさらに前進させたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	理学療法学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①前年度に引き続き、再試験回数や欠席が多い学生あるいは情緒不安定者の早期発見のため、個人面談・三者面談・オリエンテーションを重点的に実施し、その結果を学科内で共有し、学科教員全体で改善指導に取り組んだ。 ②前年度に引き続き、遠隔地の実習施設との契約を解除し、良質な関東地方を中心とした実習地を新たに開拓し,成果につなげた。 ③基礎ゼミにおいて、レポートの書き方を徹底的に指導したうえで、毎週実施される生理学実習の実験結果をレポート課題とし、レポート作成能力の向上を図った。 ④知識・技術定着のために講義や実技科目において頻回な小テストを実施し、学習習慣の定着を図った。 （2）今後の課題 ①知識・技術定着のための方法論の策定。 ②臨床実習におけるドロップアウト学生と実習施設への対策とケアを今後ともさらに充実させる。
研究	（1）特筆すべき事項 ①前年度に開発した大学生にe−ラーニングを用いた臨床実習指導プログラムを試行し、その成果を「目白大学健康科学研究」第6号に発表した。 ②前年度に引き続き、メタボリックシンドローム予備軍への発症予防研究を「行動変容を用いた生活習慣改善指導の試み」として日本公衆衛生学会に発表した。 ③介護予防関係では、都市部在住高齢者の社会活動参加者の特性−介護予防推進に向けた基礎資料−を「厚生の指標」に発表した。 （2）今後の課題 ①大学生を対象とした意識調査を実施し、介入教材の開発を推進すること。 ②実習地確保や実習訪問を効率的に実施し、研究時間を確保すること。 ③特別研究費や科研費などの外部競争的資金の獲得に全力を挙げること。 ④介護予防関連プログラムの実証研究を進めること。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①実習担当教員として、実習指導者と学生および学科間の連携をさらに強化した。 ②前年度に引き続き、臨床実習中の学生と週1回の情報交換を実施し、助言を行った。 ③態度・マナー教育を前年度に引き続き推進した。 （2）今後の課題 ①実習継続困難学生に対する学科と学生相談室と保護者とのさらなる連携強化。 ②実習前特別講義の質的向上を図ること。 ③国家試験合格率向上のための指導強化。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①さいたま市と目白大学共催の公開講座「暮らしに生かすリハビリテーションの知識」を実施し、好評を博した。 ②前年度に引き続き、卒業生・在校生対象の卒後教育の場である「目白大学理学療法学会」を2回開催した。 ③前年度に引き続き、各自治体からの要請を受け、介護予防教室へ講師を派遣した。 ④埼玉県理学療法士協会設立40周年記念事業の一環として、協会から本学の貢献に対して、感謝状と記念品が授与された。 （2）今後の課題 ①さいたま市と目白大学の共催事業のさらなる推進。 ②各自治体と連携し、目白大学が持つ知的財産を公開提供していく。各実習地に講師を派遣し、良質な実習指導者養成に貢献すること。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①良質な学生確保のために一般入試においても、新たに面接選考を実施した。 ②前年に引き続き、理学療法学科倫理審査委員会を組織し、学生の卒業論文執筆に先立つ倫理審査を実施した。 ③理学療法学科として2年次から専門基礎科目の学力向上を目的に、ゼミ単位で国家試験対策を実施した。 （2）今後の課題 ①意欲ある学生確保のためにAO入試の実施方法と合否判定法を検討すること。 ②担当教員の教育・研究レベルの向上と担当科目の定期的な見直し。設備・備品の計画的更新。
その他	（1）特筆すべき事項 ①前年度に引き続き、3年生保護者会を開催し、臨床実習・卒業研究・就職・国家試験合格までのスケジュールと認識を大学と学生・保護者が共有した。 ②前年度に引き続き、実習指導者会議を開催し、学生が置かれている状況を大学・施設間で共有し、連携して指導することを確認した。 ③前年度に引き続き、実習前に主要施設の実習指導者から「実習に臨む学生の心構えと準備について」に関するセミナーを開催した。 （2）今後の課題 ①良質な学生確保のために定期的に指定校の見直しや高校訪問実施。 ②良質で近距離の実習地を確保すること。 ③カリキュラム編成の見直し（基礎教育課程やチーム医療演習等）と実習時期の前倒しを検討すること 。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	作業療法学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①平成24年度卒業生の国家試験の現役合格率が学科設立以来最高（45名中43名合格。合格率95.6%）を達成した。 ②能動的学習の機会が増えつつある（基礎ゼミ、精神障害評価・治療学、チーム医療演習、etc）。 （2）今後の課題 ①初年次教育の充実。 ②アウトカムを重視した教育法を全教員が意識して行う。 ③上下の学生交流が進むような仕掛けを作る努力を行う。 ④平成25年度から基礎学年と専門学年の担任を分け、それぞれ専門的な援助を行う。
研究	（1）特筆すべき事項 ①平成24年度は科研費の採択が2件あった。 ②立教大学との共同研究に進展があった。 ③地域連携事業（目白大学発達研究会）による研究成果を日本作業療法学会にエントリーし受理された。 （2）今後の課題 ①引き続き外部研究資金を拡大する。 ②産業界、地域連携活動と連動した研究の推進。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①東日本大震災により亡くなった学生の同級生と記念樹への献花などを通して心的ダメージを受けた学生の支援を行った。 ②臨床実習でつまずいた学生への個別支援を行った。 ③学力に問題のある学生については、保護者との面談など丁寧に対応した。 ④国家試験対策には教員全員が全力で取り組んだ。 （2）今後の課題 ①平成25年度は東日本大震災で犠牲になった学生が所属していた学年が卒業する年度となるので、同級生とご家族に支援を行う。 ②学生指導に当たっては、本人及び家族に誤解が無いように対応する。 ③引き続き国家試験の高い合格率を維持する。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①目白大学発達キャンプ関連事業を実施した。 ②引き続き岩槻区と連携の可能性について協議した。 ③公開講座の一部を実施した。 ④専門領域の学会、審査会等に参加した。 ⑤東日本大震災後のボランティアに参加した。 ⑥「イノベーション・ジャパン2012」など産学連携活動に参加した。 （2）今後の課題 ①引き続き目白大学発達キャンプをはじめ、地域連携活動を進める。 ②引き続き専門領域の活動に参加する。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科内組織として国家試験プロジェクト、受験生アッププロジェクト、地域連携プロジェクトが機能した。 ②受験生数が増加し、平成22年比で20%以上アップを達成した。 ③平成23年２月に学科公式ブログを公開し、24年度から本格的な運用を始め、24年度は140件の記事を発信した。 （2）今後の課題 学科内PJは平成25年度を目標年度としているので、引き続き目標を達成できるよう努力する。
その他	（1）特筆すべき事項 大学院に本学部・学科を基礎とするリハビリテーション学研究科が開設されたことで、学部教員が授業等教育・運営に貢献した。 （2）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	言語聴覚学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①前年度の成果を踏まえ、専門教育における領域毎の状況や国家試験などについて学科教員が情報を共有しながら対応した。 ②OSCEが1年次からとなり、接遇から専門領域での検査まで段階的評価が可能となったことで、学生の問題点の抽出と個別指導の充実が一層図られた。 ③専門教育科目について領域ごとの評価の精度を高める検討を行い、学科内での成績会議を行い、評価法の統一を図った。 ④基礎ゼミや言語聴覚障害学演習など1年次の学習について専門教育科目の導入を円滑にする目的で、自ら考えることの指導を徹底した。 ⑤チーム医療演習においてグループによる症例検討ならびに発表を理学療法学科、作業療法学科と共同で実施した。 ⑥国家試験対策を充実させ、能力別グループ指導などを取り入れた結果、現役生の全員合格を達成した。 （2）今後の課題 ①入学者の学力差はさらに拡大しており、専門教育の導入に必要な基礎学力の向上について検討を重ね、充実を図る。 ②国家試験対策については早期からの取り組みとシステムの改変により成果を上げることができたが、今後も継続して実践する。 ③OSCEなど、臨床実習に向けた演習科目の充実を図り、特論として科目を立てることになった。 ④保健医療学部合同のチーム医療演習など、学部内で共同実施の科目の定着を図る。
研究	（1）特筆すべき事項 ①学部共通のテーマへの取組みとして接遇教育の実施を行い、初年次のオリエンテーション時に必ず実施する内容として定着させた。 ②学生の会話能力の向上をテーマとした特別研究を継続し、総合評価演習などにおける場面を分析対象として学科教員全員での取り組み、会話能力の評価表を作成した。 ③特別研究費や科研費など競争的研究資金の導入に努めた。 （2）今後の課題 ①科研費など外部資金導入への努力を継続して行う。 ②教育活動に割く時間が相対的に長く、教員個人の研究時間を捻出する方法について継続して検討する。 ③特別研究などの枠組みにおいて学科教員全員が参加する形式で、本学科の教育の特色を示すことのできる研究を継続して実施する。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①担任を中心に学生へ細かく目配りし、個々の学生が抱える生活・学業・心理面などの問題を早期に抽出して個別に対応し、教員間の情報共有に努めている。 ②臨床実習時には担当の教員と当該学生が随時、連絡を取る体制を作り、負荷がかかっている状況については早期から心理的サポートを行った。 ③国家試験の準備時期には、担当教員との頻回の面談や個別指導、集団指導を行っている。 ④国家試験前、また臨床実習前には在学生が激励会を行い、心理的支援とともに、いずれは自分たちも送られる側になるという自覚を育て、学年を超えた学科としてのまとまりを図っている。 ⑤成績不良など問題のある学生については本人への指導だけでなく三者面談を低学年時より随時実施し、保護者との情報共有と連携に努めた。 （2）今後の課題 ①学生の抱える問題をより早く発見する方略の検討を継続して行う。 ②多様化する学生の問題に対し、適切に指導を行う方法について検討を重ねる。 ③国家試験合格率の維持は入り口対策にも関与する重要な課題であると認識し、実効性のある指導方法について教員間で検討を重ねる。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①目白大学耳科学研究所クリニックを通し、耳鼻咽喉科診療、言語聴覚療法など医療の提供を継続して行っている。 ②地域の特養や介護老人保健施設との連携を図り、学内行事の際に入所者を学生が案内する行事を継続して行い、入所者の方々には好評である。 ③さいたま市との共催で、生涯学習の講義を継続して行っている。 （2）今後の課題 地域の特養や介護老人保健施設との定期的、かつ日常的な連携を図る方策を検討する。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学生指導、国家試験対策など教員間の情報共有は充実してきており、学科教員はそれぞれの持てる力を発揮し、補い合う体制を作り上げることができた。 ②それぞれの専門領域だけでなく、複数の領域に対応できる教育態勢を構築しつつある。 （2）今後の課題 ①新たな臨床実習施設の開拓と経験の浅い実習指導者に対しても教育を行い、実習指導者の養成を行う。 ②まだ知名度が十分とはいえない言語聴覚士という職種の広報とDVDを用いた学科の特色のアピールを行い、入学希望者の増加を図る。 ③助教の募集を継続しているが応募がなく、学科のさまざまな業務を現在いる教員で分担するため、個々の教員の過重な負担となっており、助教の枠を埋めることが急務である。
その他	

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート （学部長/研究科長記入）	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学部

（１）特筆すべき事項

①新旧２種類のカリキュラムが並存しているため、調整を図りつつ進めた。

②平成24年度卒業生の国家試験合格率において、看護師は94名中91名合格（現役合格率96.8%）、保健師は81名全員が合格（現役合格率100%）と高い成果をあげることができた。

③実習病院と平素の実習指導における連携、実習担当責任者と学部教員との連携会議の開催に加え、就職支援活動や実習施設への研修会講師派遣等に努め、実習施設との関係をさらに緊密にすべく努力した。

④高度かつ実践的な看護学教育を実現するため、看護学部看護学科、大学院看護学研究科および目白大学メディカルスタッフ研修センターの３組織を一体化し、看護学系教員協議会を立ち上げた。

（２）今後の課題

①新旧２種類のカリキュラムが並存しているため、特に読み替え科目において問題の生じないように注意深く確認しながら進行する。

②次回には国家試験の出題基準の変更がある。新出題基準を充分把握し、継続して高い合格率をあげることができるように努力する。

③都内、埼玉県内および近県における看護系大学の新設が続いているため、実習会議の頻繁な開催や就職率の向上を図るなど実習施設との連携がさらに緊密になるように努める。

④教員の研究促進と外部資金の積極的獲得に努める。

⑤看護学系教員協議会を通じて、学部教育、研究科教育及び認定看護師教育の見直しと充実に努める。

⑥地域に開かれた大学としての学部の役割を検討し、実践する。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	看護学科

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正による新カリキュラムと旧カリキュラム並行した教育の2年目の検証と調整を行った。 ②学生定員80名から100名への定員増による実習地確保と病院実習のための病棟配置の学生人数の調整を行った。 ③主たる実習病院実習担当責任者と学部教員との連携会議（第3回）を主催した。 （2）今後の課題 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正による新カリキュラムと旧カリキュラムの並行運営と学生定員増による教育体制の見直しと改善の継続検討。
研究	（1）特筆すべき事項 ①教員各自の研究促進と研究費の積極的獲得（科学研究費、特別研究費等）に努力した。平成24年度は科研費の新規採択が2件、継続採択が6件で、学内の特別研究費は5件が継続採択された。 ②主たる実習施設、看護協会等に「研究の促進と質の向上」を目的として積極的に教員を派遣し、共同研究や大学院生の研究調査の機会を得る等の成果を得た。 ③産学連携フェア「彩の国ビジネスアリーナ」に、本学科の専任教員7名が共同研究者として出展した。 （2）今後の課題 ①教員個々の研究促進と学外研究費の積極的獲得の継続及び海外への研究発表。 ②主たる実習施設および看護協会への継続した教員の派遣の継続。
学生指導	（1）特筆すべき事項 平成24年度卒業生の看護師国家試験合格率は96.8%、保健師国家試験合格率は100%、および就職率は100%の成果があった。 （2）今後の課題 ①多様な背景を持つ学生への学習教育および日常生活上の個別指導体制強化の継続。 ②看護師・保健師国家試験不合格者のフォローおよび国家試験合格率の維持向上。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 地域に開かれた大学としての学部の役割検討と実践。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①教員会議、学科内会議、各委員会等の定期的会議の開催と有機的運営に努力した。 ②夏季集中会議開催により、当該年度の教育課程進捗状況と課題の確認、その他教育運営の中間的見直しと検討を行った。 （2）今後の課題 ①学部内組織の編成と役割分担の見直しと確立。 ②学部、研究科および認定看護師養成の有機的・効果的教育活動のための教員組織の検討。
その他	（1）特筆すべき事項 卒業生の情報交換の場として、また卒業生がお互いに研究活動などで切磋琢磨できるよう同窓会支部「槻の会」設立を支援した。 （2）今後の課題 同窓会支部「槻の会」の自立のための支援の継続。

別　科

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	別科用評価シート （別科長記入）	組 織 名 称 （評価単位名称）	日本語教育センター 留学生別科日本語専修課程（JALP）

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①平成23年度秋学期より新設したA. 総合日本語コース（主に大学学部進学者対象）、B. 大学院進学研究コース（大学院進学者対象）のコース・カリキュラムがさらに学習者のニーズに合うよう、日本語教育の高度化を実施した。その結果、Bコースの存在意義や価値感の認知度が上がった。 ②海外協定校の中国天津商業大学宝徳学院受入の３＋１制度（３年次まで本国で、４年次は目白大学で単位履修し卒業認定）の学生を秋学期6名受入、継続生2名、計8名の日本語教育を実施した。 ③「短期日本語・日本文化研修」を2/5～17に参加者19名（韓国15・中国3・フランス1）で実施した。オリンピックセンターでなく学内施設、留学生寮を利用し、効率的・効果的かつリスク管理のとれる体制で実施できた。内容につき学生から高い評価を得た。 （2）今後の課題 学生の希望する学部、大学院への合格率を上げること。
研究	（1）特筆すべき事項 外部機関で実施される日本語教育学会や研究会にできるだけ参加し、日本語教育の動向、最新情報の収集に努め現場の教育に活かした。 （2）今後の課題 JALP内部での研究会活動を促進すること。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①進路ガイダンスを春学期より計画的に実施した。進学実績は大学院合格者14名、大学進学8名、専門学校が7名となっている。前年に比べ大学院進学者を多く輩出できた。 ②学生の個人面談を実施し早期問題解決にあたった。日本語学習に関してはクラス担任、生活面は国際交流サービスの双方で指導した。 ③春学期より学生の日本語能力向上と目白大学日本人学生との交流を目的にチュートリアルセッション（週1～2回）を設けた。秋学期はJALP学生40名、日本人学生38名（外国語学部4学科及び地域社会学科）の学生が参加し、異文化国際交流の場が醸成された。 ④単位認定に必要な出席率を80%以上にし、日々の授業参加への取り組み・熱意を向上させた。 （2）今後の課題 来日目的を達成し、学習意欲を高めるため、学生のしつけ教育、来日時の初年次教育、日常の生活指導をさらに徹底すること。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①中井町内会とのJALP留学生・交換留学生との交流活動を通し、地域の国際化を推進した。 ②本学と協力関係を締結した日本山西省交流協会と協力し「中国語＆日本語弁論大会」を本学の研心館にて（11/18）実施し、本学より優勝・入賞者を輩出できた。 （2）今後の課題 中井町内会を中心に、留学生が日本人家庭を訪問したりホームステイできる環境作りをし、日本理解及び日本人との交流を進める。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①平成24年度は春学期69名、秋学期77名、計146名の留学生に対する日本語教育を実施した。専任講師3名と非常勤日本語講師をクラス担当に委任、コース中は　日本語講師会議を1か月に1回開催し、クラス状況の把握、問題対応、情報の共有化を図った。 ②日本語教育センター会議を年間5回開催し、センター委員へのJALPに関する情報提供、意見交換等を行った。 ③JALP学生募集の広報活動、説明会実施のため海外出張（11月にベトナム、中国）し、海外提携校や関係機関を訪問して優秀な学生の確保に努めた。 ④「短期日本語・日本文化研修」の企画から実施まで、国際交流サービスグループと協力し、無事終了させた。 （2）今後の課題 別科留学生日本語専修課程の教員の配置及び定数を確立させること。
その他	（1）特筆すべき事項 2011年の大震災、中国・韓国との領土問題が長引く中、中国・韓国からの留学生の来日希望者が減少した。一方ベトナムからの留学生が日本留学を目指して行列のできる状況が生まれた。JALPでは多くの候補者の中から将来性のある留学生を選抜した。しかし、経済的な事情からアルバイトに走る学生が出たため、日本語学校への移籍を行った。 （2）今後の課題 目白大学のJALPと他機関との差別化を一層図る。目的意識が明確で、日本語能力、語学適性能力が高い学生の安定的な確保と進学実績を挙げる高度な日本語教育を実施すること。

附属施設

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	エクステンションセンター用評価シート

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項

①講座（新宿キャンパス）
○マイナーな言語としてフィンランド語・スウェーデン語・デンマーク語・タイ語・台湾語・ポルトガル語を開講。
○新宿キャンパスでは託児室を完備。

②講座（岩槻キャンパス）
○目白大学公開講座：さいたま市との共催で行うキャンパス近隣地域の方々向けの医療系公開講座を毎年実施しており、平成24年度は保健医療学部の教員が『暮らしにいかすリハビリテーションの知識』と題して設定したところ、定員（60名）を大幅に超える申し込みがあった（抽籤を実施）。
社会貢献事業の一環と位置付けているため、受講料は無料としている。

③物的資源活用：
○教育研究に支障をきたさない範囲で、有料で大学施設を学外諸団体、及び企業に貸し出している。

（２）今後の課題

①講座（新宿キャンパス）
○教室数の制約から開講できる講座数に限りがあるので、よりニーズの高い講座への転換を図る。

②講座（岩槻キャンパス）
○目白大学公開講座は共催するさいたま市からの補助が少なく、広告費や講師料などを含めると必ず赤字になるが、地域貢献事業として広告費等を極力削り、赤字を抑えていきたい。

③物的資源活用
○今年度は学外諸団体の行う資格試験等の受験生の減少により、仮予約していた施設の一部キャンセルが続き収益は減少した。
○諸団体・企業側の経費削減から施設使用の使用時間の縮小傾向が見られることから、今後は学内行事との兼ね合いを再度見直し、無駄のない貸出を目指したい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	心理カウンセリングセンター用評価シート

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項

①センター（新宿）及び分室の相談体制・相談業務の拡充
　１）平成24年度の成果（実績報告）
　　○センター(新宿)は平成23年度より、週２日を午後８時までの開室としている。
　　平成24年度はその成果として、相談件数のさらなる増加（平成23年度2494件→平成24年度2650件）が見られた。
　　新規申し込み件数は136件となり、前年度（126件）より１割弱増加している。
　　○分室では非常勤相談員の増員など相談体制の整備を進めた。
　　その結果、分室の延べ面接回数は前年度（757件）に比べて増加（762件）している。
　　○その他、センター（新宿）、分室、それぞれ埼玉県市町村共済組合事業及びＥＡＰ（従業員支援プログラム）事業の
　　伸びが大きかった（前年比251％）。
　２）平成24年度の成果に対する評価
　　○センター（新宿）、分室ともに来談件数は昨年度以上の高い水準を維持した。
　　○開始より３年を経てＥＡＰ事業が着実に定着してきた。このことによって増収を保つことができた。

②臨床心理学的知識及び援助技術の提供による地域貢献
　１）平成24年度の成果（実績報告）
　　a. セミナー形式公開講座(新宿：３講座)　参加者20名
　　b. 公開講座(分室)「子どもの虐待を考える～絵から見た子どもの心の叫び～」
　　（講師：本学心理カウンセリング学科教授　田中勝博）参加者20名
　　c. 公開講座(新宿)「臨床におけるインフォームド・コンセント～心理療法の観点から～」
　　（講師：メンタルヘルス・コンサルテイション研究所　熊倉伸宏先生）参加者36名
　２）平成24年度の成果に対する評価
　　前年度に引き続き、セミナー形式講座、公開講座ともに好評を博した。

（２）今後の課題

①分室の相談体制の整備
　　独立行政法人国立病院機構埼玉病院のメンタルヘルス事業の定着もあり、分室に対する地域の要望が多くなってきている。
　　平成24年度は非常勤相談員を増員したが、地域の要望に対して十分とは言い難く、時間的かつ人員的な体制の強化を図りたい。

②地域貢献活動の拡充
　　○セミナー形式講座はセンター所員持ち回りで多様な講座を用意して定例化する。
　　○新宿及び分室で行う公開講座は、時事に鑑みて適切なものを企画する。
　　○埼玉病院小児科及び和光市役所保健センターからのコンサルテーション援助要請に応じて、
　　センター長及び分室長などによるコンサルテーションの援助を積極的に行っていきたい。
　　○目白大学耳科学研究所クリニックとの連携強化を図り、クリニック利用者への貢献も行っていきたい。

③心理学研究科修了生等の臨床心理士に対するフォローアップ研修制度の確立
　　心理カウンセリングセンターが大学院心理学研究科臨床心理学専攻における臨床心理士養成機関としての役割を担っていることから、
　　センターが中心となって修了生のフォローなどを行う研修体制の枠組みを構築することについて、現在検討中である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究所用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	教育研究所

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項

①次の２つのテーマについて調査研究を行った。
- 「大学教員の基本的な授業技術」
- 「ＩＣＴを活用した新しい授業方法の開発」

②所員会議について
- 所員会議を10回実施
- 研修会、公開講座、紀要等の発行に関する査読などを実施
- 会議資料や議事録については、ＰＤＦファイルなどに電子化しＷｅｂ上で共有

③ＩＣＴ活用に関すること
- 教員の授業力や指導力を高めるＩＣＴ活用研修会を実施した。
- 文部科学省の補正予算によりタブレットＰＣを導入した。
- Apple社のiPadの貸し出しを始めた。

④その他
- 『目白大学高等教育研究』の査読、『人と教育』の原稿の閲読に関する規定を定めて４年目。査読技術の向上が図られた。
- 『目白大学高等教育研究』の原稿締め切り厳守を敢行したことにより、辞退が８件あった。
- デザインと内容を変更して３年目の『人と教育』は、学外からの問い合わせが増えている。

（２）今後の課題
- 教育研究所の業務内容が多岐にわたり、所員の負担が大きいため改善が必要。
- 新規事業の取組みや充実を進めているが、助手の負担が増大しているため改善が必要。
- Ｅラーニングの開発が終了。来年度以降は普及に関する取組みが必要。
- 高等教育研究を中心とした教育研究所としての位置づけの具体化。
- 兼任研究員だけでなく専任教員（研究員）を配置し、研究機関としての適切な取組みの検討と組織改革が必要。
- 教員の授業力を高めるための支援に関して、他の部署と連携した検討が必要。
- プロジェクト研究の進め方の改善に向けて来年度以降具体的に実施し、研究成果を残す。
- 研究所の取組みの公開や研究成果の発信として、ホームページなどを活用した宣伝活動のさらなる充実。
- 所員の分掌業務としての位置づけが明確でないため、教授会での所員の公表等を通じて仕事内容の評価と認知度を高める必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究所用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営研究所

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項
①研究交流を通じた研究成果改善活動の促進を実施した。
　具体的には経営研究所ライブラリー発刊を通じた他の機関の著者との研究交流による成果として実現している。
②経営研究所ライブラリーの継続的発刊として『会計学と経営学のための事例研究アプローチ』を刊行した。
③資料を厳選したうえで、資料を収集した。具体的には、図書館との重複資料があり、その資料を整理した。

（２）今後の課題
①会計学以外の分野における資料収集の強化
②経営研究所の方向性や特徴付けの明確化とその着実な研究成果の公表
③日本における経営研究所の中での目白大学経営研究所の位置や社会的分業の明確化とその特徴付け・差別化の促進
④経営学部専任教員による研究成果公開の支援とその教育への反映
⑤大学院経営学研究科との協賛による公開講座の開講
⑥目白大学経営研究所ライブラリーの継続的刊行

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	メディカルスタッフ研修センター用評価シート

項目	自　己　評　価
教育	（1）特筆すべき事項 ①課程入学前指導として、事前課題や急性期の看護経験の少ない者に対してICU研修を推奨した。 ②訪問看護ステーション実習を病院実習の前に位置づけて早期から退院支援を計画できるようにした。 ③看護セミナーや学会をセンターで開催し、専門知識の習得やボランティアを通して運営の実際を学ぶことができた。 ④前年度の評価を踏まえ、実習先（7施設）の指導者と教員による「実習指導者会議」を発足させ、実習受け入れや研修生に対する指導方法、評価のあり方などの意見交換し充実を図った。 ⑤日本看護協会認定審査に向けて次の2つを計画実施した。 ・認定課程修了者を対象とした「フォローアップ研修」を実施。当機関以外の認定看護師も多数参加し、認定看護師のレベル保持並びに相互交流の場となった。認定看護師教育を看護大学で実施していることの意義は大きいと考えられた。 ・本試験を想定した「認定模擬試験」を実施。平成23年度・24年度修了生で本年度受験予定者25名全員が受験した。試験終了後には問題の解説を実施した。 （2）今後の課題 上記①～⑤実施後の評価結果（実習評価やアンケート等）では成果があったので、平成25年度も計画し継続する。 平成25年度から当該分野カリキュラム見直し期間に入るため、過去2年間の実績や④の討議内容等をもとに改正案を看護協会に提案する。
研究	（1）特筆すべき事項 教育課程が7ヵ月と短期であり、課程の担当教員が2名だけでしかも専任教員は毎年新任であるなどの事情から研究を継続して実施することが難しい環境にあって、本センター教育課程修了生が本学で開催した看護学会に積極的に参加し研究発表した。 （2）今後の課題 ①脳卒中リハビリテーション看護教育課程の修了生を対象に、ネットワーク作りに関する研究に着手したい。 ②当該分野は認可から3年が経過したので、認定看護師の活動状況に関する調査研究を行いたい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 なし （2）今後の課題 研修生は臨床経験、年齢、施設の実態等からさまざまなキャリアの者が入学してくるため、規定の教育科目と時間数では教育の目的達成に苦慮することが多い。そのため、個別指導にかなりの時間を要している。特に学外実習では研修生に臨床経験の差があることから、実習前に施設の事前訪問を行い、臨床指導者とコミュニケーションをとりながら実習計画の調整を行うことができる体制作りをしたいと考えている。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①看護の質向上を目的に「脳神経看護セミナー」を3回開催した（うち1回は当センターで開催、毎回約200名が参加）。 ②日本脳神経看護研究学会の第1回関東地方部会を当センターで開催した（72名が参加）。 ③公開講座「地域包括ケアシステムの実際と今後の課題」を開催した。 ④和光市の放送大学学習センターにおいてセンター長が職業の継続の意義を主題として「自己の世界を拡げる」をテーマに講演し、和光市住民に対する当センターのPRに努めた。 ⑤脳卒中学会「STROKE13」において主任教員が、「脳卒中を専門とする看護師の養成について～変化する時代の要請に応えて～」をテーマにシンポジウムのシンポジストを務め、認定教育課程内容と課題について講演した。当センターのPRに努めると同時に、当教育課程が大学に位置づけられていることによるメリットについても強調した。 （2）今後の課題 上記③は広報活動不足により外部参加者が少なかった。今後、地域住民を対象としたセミナーや公開講座を企画する際には、広報についても十分検討していく。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①看護学部の教員をメディカルスタッフ研修センターの教員として位置づけ、両者の一体性を強化して教育課程を運営する組織改編の基盤が形作られた。 ②認定看護師教育課程運営について看護学部教員協議会の発足により規程の発議ができた。 （2）今後の課題 上記①に基づく新しい運営体制を平成26年度から本格化させるための準備を進めている。また、現行の教育課程は年度の中間に相当する6月から12月までの7ヵ月で実施しているが、平成26年度からはこの実施時期を9月から3月に変更し、4月から9月までの春期には認定看護師等を対象としたレベルアップを目的とした卒後教育の計画を立案実施する予定である。
その他	（1）特筆すべき事項 平成24年度日本看護協会認定審査に不合格となった修了生3名のうち、「脳卒中リハビリテーション看護」修了の2名について、次年度受験に向けたフォローアップ計画を面接と電話で伝え、必要に応じて試験対策用資料を（2～3回）提供した。この2名は上記「認定模擬試験」を受験した。「がん性疼痛看護」修了1名についてもこの「認定模擬試験」受験予定であったが、直前に体調不良となり受験していない。 （2）今後の課題 ①専任教員には本学修了生の認定看護師資格者を確保するよう努力する。 ②平成27年度には本学看護学部の第1期卒業生が臨床経験5年目に達するので、平成25年度から積極的に声をかけてセンター教育課程の入学者確保に努力する。